

清水春流『桑名百詠』訳注稿 (上)

二宮俊昭  
森川重昭

凡 例

一、本稿は、江戸時代貞享から元禄にかけて伊勢国桑名（現、三重県桑名市）に止住した尾張出身の俳人・儒者、清水春流（名は仁。春流は字。自ら釣虚散人と称す）の漢詩集『桑名百詠詩章』（以下、『桑名百詠』という）を翻刻し、訳注を試みたものである。桑名百詠は、清水春流の自作の詩九十八首と、唐の寒山の詩、宋末元初の実存の詩各一首の、計百首から成っている。本稿にはこのうち三十二首までを収めた。

二、底本について

- (ア) 底本には、近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従 仮名草子編 17』（昭和四八年 勉誠社）所収のものを用了。
- (イ) 底本の書誌に関しては、上掲書に付されている岡本勝氏の解説に詳しく述べられている。

三、翻刻について

(ア) 添仮名の「メ」を「シテ」に、「フ」を「コト」に改め、縦点（・）を省略した。

(イ) 明らかに句点（○）が欠落していると思われる所には、句点を補った。

四、訓読と書き下し文について

(ア) 訓読は原文の読み方に従った。

(イ) 書き下し文においては、漢字は正字体を用い、新字体に改め、仮名づかいは旧に依った。

五、語釈について

(ア) 語釈の順序は、原文における順序に従った。

(イ) 見出し語は原文のままを示したが、説明文においてはすべて新字体を用いた。ただし、漢籍より書き下し文の形で引用した場合などは、漢字は新字体に改め、旧仮名づかいを用いた。

(ウ) 引用文中の原注は「」で示し、本稿の筆者注は（ ）で示した。

(エ) 桑名の地誌に関する事項や語句の考証と解釈は、近藤奎編・平岡潤校補『桑名市史 本編・補編』（昭和三四・三五年 桑名市教育委員会）を参照しながら、専ら『久波奈名所図会』に拠った。また、桑名の地誌に関連して、近藤重信著『長島町誌 上・下巻』（昭和四九・五三年 長島町教育委員会）、および『海津町史 通史篇上・下』（昭和五八・五九年 海津町）を併せて参照した。

『久波奈名所図会』上中下三巻は、桑名城下伝馬末町（現、伝馬町）にあった浄土真宗西本願寺派長円寺第十一代住職義道が著わしたものである。桑名城下の町々、城外桑名藩領の村々の現況と歴史、桑名城下城外の名所旧跡神社仏閣の現状と由来などを、城下鍋屋町に住した画家、工藤麟溪が描くところの挿画・挿図を数多く用いつつ、精細にかつ生々と記している。そして、九箇所にわたって桑名百詠中の詩を引用しており、まさに桑名百詠を読解・鑑賞するための好個の参考文献であるといえることができる。

義道の跋文に拠れば、この書は享和二年（一八〇二）に成ったものであるが、文化元年（一八〇四）の刊記を付しながら、結局上梓するに至らず、版下本とでもいうべき写本として伝わっていた。昭和三十八年に桑名市文化財に指定され、現在も長円寺に所蔵されている孤本である。しかし、昭和五十二年に、久波奈古典籍刊行会によって『影印校注 久波奈名所図会』三巻として、釈文を付したものが覆刻され、現在は大変利用しやすくなっている。

# 桑名百詠序

由志學<sup>ルマデ</sup>一至<sup>ニ</sup>於耳順<sup>ノ</sup>年<sup>ニ</sup>。著<sup>テ</sup>逢衣<sup>ヲ</sup>。挑<sup>ケツ</sup>包<sup>ミ</sup>。頂<sup>キ</sup>笠<sup>ヲ</sup>。東<sup>ヲ</sup>瞰<sup>ミ</sup>西<sup>ヲ</sup>暢<sup>ニ</sup>。萍<sup>ノ</sup>浮<sup>ミ</sup>蓬<sup>ノ</sup>轉<sup>シ</sup>。心<sup>ニ</sup>醉<sup>テ</sup>煩惱<sup>ノ</sup>酒<sup>ニ</sup>未<sup>タ</sup>醒<sup>メ</sup>。羸<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup>浮思<sup>シ</sup>結<sup>ス</sup>心<sup>ヲ</sup>塵<sup>ヲ</sup>口<sup>ニ</sup>。倦<sup>テ</sup>遊<sup>ニ</sup>說<sup>ニ</sup>。逮<sup>テ</sup>耆<sup>ヲ</sup>罷<sup>ス</sup>歸<sup>ル</sup>於<sup>ニ</sup>那<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>野<sup>ニ</sup>。尾<sup>ノ</sup>陽<sup>ノ</sup>父<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。將<sup>テ</sup>下<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>遊<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>淡<sup>ニ</sup>。合<sup>セ</sup>氣<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>漠<sup>ニ</sup>。盃<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>蘸<sup>シ</sup>月<sup>ヲ</sup>。窺<sup>ニ</sup>底<sup>ニ</sup>淪<sup>シ</sup>茶<sup>ヲ</sup>。順<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>樂<sup>ニ</sup>命<sup>ヲ</sup>。以<sup>テ</sup>求<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>保<sup>ニ</sup>餘<sup>ヲ</sup>生<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。豈<sup>ニ</sup>意<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>江<sup>ヲ</sup>來<sup>ニ</sup>桑<sup>ノ</sup>名<sup>ニ</sup>。髮<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>面<sup>ニ</sup>皺<sup>ニ</sup>乃<sup>レ</sup>居<sup>ニ</sup>市<sup>ニ</sup>。時<sup>ニ</sup>自<sup>リ</sup>覲<sup>ス</sup>覬<sup>ス</sup>矣<sup>ニ</sup>。且<sup>ツ</sup>獨<sup>ニ</sup>嘯<sup>ス</sup>矣<sup>ニ</sup>。雖<sup>レ</sup>然<sup>ト</sup>。振<sup>レ</sup>古<sup>ノ</sup>聖<sup>ノ</sup>賢<sup>ノ</sup>爲<sup>レ</sup>道<sup>ヲ</sup>爲<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>。歷<sup>ル</sup>二<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>殊<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>。不<sup>ニ</sup>亦<sup>ニ</sup>尠<sup>ニ</sup>。夫<sup>レ</sup>奚<sup>ニ</sup>足<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>恥<sup>ル</sup>乎<sup>ニ</sup>哉<sup>ニ</sup>。平<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>服<sup>ニ</sup>膺<sup>ニ</sup>儒<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>。志<sup>ニ</sup>烈<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>傳<sup>ニ</sup>。篤<sup>ニ</sup>意<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>史<sup>ニ</sup>。務<sup>テ</sup>學<sup>ヲ</sup>有<sup>レ</sup>餘<sup>ヲ</sup>。則<sup>レ</sup>臨<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>雅<sup>ニ</sup>囿<sup>ニ</sup>。登<sup>テ</sup>翰墨<sup>ヲ</sup>場<sup>ニ</sup>。玩<sup>ニ</sup>義<sup>ニ</sup>理<sup>ニ</sup>。嚼<sup>ミ</sup>滋<sup>ニ</sup>味<sup>ニ</sup>。慕<sup>ニ</sup>陶<sup>ノ</sup>柳<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>冲<sup>ノ</sup>澹<sup>ノ</sup>簡<sup>ノ</sup>古<sup>ニ</sup>。希<sup>ニ</sup>孟<sup>ノ</sup>賈<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>遠<sup>ノ</sup>寒<sup>ノ</sup>瘦<sup>ニ</sup>。常<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>眼<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>世<sup>ノ</sup>利<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>華<sup>ニ</sup>焉<sup>ニ</sup>。朱<sup>ニ</sup>愚<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>道<sup>ノ</sup>德<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>實<sup>ニ</sup>焉<sup>ニ</sup>。灼<sup>カニ</sup>知<sup>ハ</sup>足<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>求<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>。問<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>游<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>門<sup>ニ</sup>讀<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>兒<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>。先<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>講<sup>ニ</sup>餘<sup>ヲ</sup>乘<sup>ニ</sup>興<sup>ニ</sup>。陵<sup>ニ</sup>巒<sup>ニ</sup>吟<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>煙<sup>ノ</sup>霞<sup>ヲ</sup>。瞰<sup>ニ</sup>江<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>。其<sup>ノ</sup>詩<sup>ノ</sup>藁<sup>ニ</sup>括<sup>ニ</sup>囊<sup>ニ</sup>沈<sup>ニ</sup>焚<sup>ニ</sup>。無<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>似<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>慳<sup>ノ</sup>貪<sup>ニ</sup>。奚<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>使<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>新<sup>ノ</sup>學<sup>ノ</sup>流<sup>ノ</sup>輩<sup>ヲ</sup>彈<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>世<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。於<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>乎<sup>ニ</sup>。乃<sup>レ</sup>延<sup>ニ</sup>楮<sup>ノ</sup>先<sup>ノ</sup>生<sup>ヲ</sup>。招<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>居<sup>ノ</sup>默<sup>ヲ</sup>。命<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>八<sup>ノ</sup>公<sup>ヲ</sup>。走<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>尖<sup>ノ</sup>頭<sup>ノ</sup>奴<sup>ヲ</sup>。隨<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>兒<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>。雖<sup>レ</sup>噬<sup>レ</sup>齊<sup>ニ</sup>遂<sup>ニ</sup>貽<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>塵<sup>ノ</sup>謗<sup>ヲ</sup>。

崑元祿紫方年春日

尾陽 陋儒清水春流仁敬題 二平桑名 油巷 吸月堂

志学由り耳順の年に至るまで、逢衣を着けて包を挑げ笠を頂き、東を瞰西に暢みて、萍のごとくに浮み蓬のごとくに転じ、心煩悩の酒に酔ひて未だ醒めず。粗見浮思、結心塵口、遊説に倦みて、者に逮んで罷めて那古野に帰る。尾陽は父母の国なればなり。將に以て心を淡に遊ばしめ、氣を漠に合はせ、盃中に月を蘸し、窓底に茶を瀹き、物に順ひ命を楽しみて、以て安を求めて余生を保たんとす。豈に意はんや又江を渡つて桑名に來り、髪白く面皺むまで乃し市に居らんとは。時より自ら颯嘗し、且つ独り嘔噓す。然りと雖も、古振り聖賢道の為め人の為め、年所を諸殊方に歷ること、亦た尠からず、夫れ奚ぞ以て恥ずるに足らんや。平生儒行に服膺して、志経伝に烈しく、意を文史に篤くして、学を務めて余り有るときは、則ち文雅の囿に臨み、翰墨の場に登つて、義理を遊び、滋味を嚼み、陶柳の冲澹簡古を慕ひ、孟賈の高遠寒瘦を希ふ。常に世利の華に白眼にし、道德の実に朱愚にす。灼かに足れることを知らば又何の求か之れ有らん。問者門に遊ぶ讀書の児が曰く、先生講余興に乗じて、轡に陵りて煙霞を吟じ、江を瞰ては風月を賞し、其の詩稿、括囊沈焚、無乃慳貪に似たり。奚如んぞ新学の流輩をして、彈く世に見はしめざるや。是に於て、乃し楮先生を延き、石居黙を招き、十八公に命じ、尖頭奴を走らしめて、児が言に随ふ。齋を噬むと雖も遂に塵謗を貽す。

時に元禄紫方の年春日

尾陽の陋儒清水春流仁、敬んで桑名の油巷の吸月堂に題す

○志學 十五歳。『論語』為政篇に「吾十有五にして学に志す」と。○耳順 六十歳。『論語』為政篇に「六十にして耳順ふ」と。

○逢衣 儒者の着る袖の大きい衣服。『礼記』儒行篇に「(孔)丘少くして魯に居り、逢掖の衣を衣する」と。○東瞰西暢 各地を遊覽する。『文選』卷八、揚雄の「羽獵の賦」に「東に瞰れば目尽きぬ、西に暢むに涯亡(な)し」と。○萍浮蓬轉



あちこちをとめどなく放浪する。萍は、浮草。蓬は、よもぎ。『文選』卷十、潘岳の「西征の賦」に「飄として萍のごとく浮びて蓬のごとくに転(め)る」と。○結心 むすばれた心。○塵口 世塵にまみれた口。○希 年老いてしみのできた顔。『文選』卷

十九、韋孟の「諷諫」詩に「歲月其れ徂(き)き、年其れ希に逮ぶ」と。○那古野 名古屋。御三家の筆頭尾張徳川家の城下町。

○尾陽 尾張国を中国風にいう。○遊心於淡、合氣於漠 心を恬淡の境地に遊ばせ、氣を空漠の世界に合わせる。『莊子』応帝王

篇に見える。○桑名 伊勢国桑名(現、三重県桑名市)。当時は松平越中守の城下町。旧東海道五十三次の宿駅の一つ。尾張国熱

田の宮宿からの渡場。○乃「いまし」と訓するのは、古訓。○覲嘗 恥かしさのために顔が赭くなる。『文選』卷六、左思の「魏

都の賦」に「瞻然として所を失し、覲嘗の容有り」と。○喟喟 大いに笑うこと。ここでは、自嘲の笑い。『文選』卷十八、嵇康

の「琴賦」に「喟喟して日を終ふ」とあり、五臣注に「喟喟は、笑なり」という。○振古 いにしえより。振は、自の意。『詩経』

周頌・載芟に「今のみ斯れ今なるに匪(あ)ず、古振(より)り茲(か)の如し」とあり、毛伝に「振は、自なり」という。なお、朱熹の「詩

集伝」には「振は、極なり」と注する。○年所 年月。所は、数の意。『尚書』君奭に「多く年所を歴す」と。○殊方 異なっ

た地域。○服膺儒行 儒者の行ないを身につける。『文選』卷五十四、劉峻の「弁命論」に「六経を通涉し、循環として善く誘(い)

ひ、儒行を服膺す」と。なお、『礼記』に儒行篇がある。○経傳 経書とその注釈。○文雅園 風雅の集い。園は、園の意。

下文の「翰墨場」と同義。『文選』卷四十八、揚雄の「劇秦美新論」に「文雅の園に遥集し、礼楽の場に翱翔す」とあり、卷五十八、

王褒の「楮澗の碑文」にも同様の表現がみえる。○翰墨場 詩文の会。『文選』卷二十一、謝瞻の「張子房」詩に「濟濟たる属車

の士、粲粲たる翰墨の場」と。○義理 文辞の意味内容。○陶柳 晋末宋初の陶淵明(三六五―四二七)と中唐の柳宗元(七七

三―八一九)。○冲澹 淡泊で閑静なこと。冲淡。南宋・魏慶之の『詩人玉屑』卷十三に「龜山語録」を引いて「淵明の詩の及ぶ

可からざる者は、冲澹深粹、自然に出ず」云々と。○簡古 簡潔で古朴なこと。蘇軾の「黄子思の詩集の後に書す」(『東坡題跋』

卷二)に「独り韋応物・柳宗元、纖穠を簡古に発し、至味を澹白に寄せ、余子の及ぶ所に非ざるなり」と。なお、『詩人玉屑』卷十五、

柳儀曹の条にもこれを引く。○孟賈 中唐の詩人、孟郊（七五一―八一四）と賈島（七七九―八四三）。ともに貧窮に喘いだ苦吟派の詩人として知られる。○寒瘦 蘇軾の「柳子玉を祭る文」に、「郊寒島瘦」と評す。『詩人玉屑』卷十五、孟東野賈浪仙の条にもこれを引く。○白眼 冷やかに見る。晋の阮籍が、礼教に拘束されている俗物を白眼で見たという故事（晋書「阮籍伝」）による。○世利之華 下文の「道德之実」とともに、『文選』卷四十五、班固の「賓の戯れしに答ふ」に「世利の華を見て、道德の実に闇し」とある。○朱愚 おろかなこと。無知。『莊子』庚桑楚篇に「人、我を朱愚と謂ふ」と。○知足 足ることを知る。身の程を弁えて欲ばらない。『老子』第三十三章に「足るを知る者は富む」、同じく第四十四章に「足るを知れば辱められず」と。○陵巒 丘を越える。『文選』卷二、張衡の「西京の賦」に「巒（か）に陵（ほり）壑（た）を超ゆ」と。○煙霞 もやとかすみ。山水の景色。○瞰江 川をみおろす。『文選』卷四、左思の「蜀都の賦」に「綺窓を列ね而して江を瞰（み）る」と。○括囊 ふくろの口をくくる。『易』坤に見える語。ここでは、袋の中にしまうこと。○沈熒 熒は、ひかり。『文選』卷四、左思の「蜀都の賦」に「火井、熒を幽泉に沈め、高燭、燭を天垂に飛ばす」と。ここでは、すぐれた詩文を蔵したまま世に出さないことをいう。○無乃 わが国の古訓ではこの二字を「ムシロ」と読むが、かえって…ではあるまいかという反問の語気を示す表現。伊藤東涯（一六七〇―一七三六）の『用字格』に「古来ノ訓ニ無乃ニ字ヲムシロトヨムハアタラズ」、岡白駒（一六九二―一七六七）の『助字訳通』に「無乃ラムシロト読メドモ無寧ト義殊ナリ無乃ハ無ニ乃云云一乎ト云フコトナリ、寧ノ義ニ非ズ」という指摘がある。○新學流輩 初学の仲間。○楮先生 紙の異名。楮は、こうぞ。筆を擬人化した韓愈の戯文「毛穎伝」に「穎は絳人陳玄・弘農の陶泓及び会稽の楮先生と友とし善し」と。なお、江戸時代に広く流行した『書言故事大全』には、卷十二、文物類、紙の条に「楮先生」の項を挙げる。○石居黙 硯の異名。文高の「即墨侯伝」（宋の蘇易簡「文房四宝」卷三に引く）に、硯を擬人化して「石虚中、字は居黙。南越高要の人なり」云々とある。『書言故事大全』では、卷十二、文物類、硯の条に引く。○十八公 墨の異名。松の字を分析すれば十八公となることから、松のことをいい、更には松烟で作った墨のことを指す。○尖頭奴 筆の異名。宋・楊時可（適）の「絶

句」詩（『聯珠詩格』卷二）に「尖頭奴五兄弟有り、十八公四客卿を生ず」と。○噉齊 ほぞをかむ。『左氏伝』莊公六年に「若し早く図らざれば、後に君、齊を噉むも其れ及ばん」と。齊は、臍と同じ。○塵謗 世間のそしり。『文選』卷六十、陸機の「魏の武帝を弔ふ文」に「塵謗を後世に貽（し）す」と。○紫万年 未詳。但し、『桑名百詠』が元禄三年（一六九〇）に刊行されていることからして、この「紫万年」は、同年を指すものであらう。○陋儒 見識の狭い、つまらぬ儒者。○油巷 桑名城下油町（あぶらまち）也。『久波奈名所図会』上巻「桑名町割」の項に、「町数三十町、東西三丁、南北二十六丁一間、往還通り十一町、脇町十九町」とある、その脇町に属する。また中巻「油町」の項に「職人町（ちま)の西町なり」とあり、「魚町」の項に「油町の西町なり。南魚町（みななま）といふ。又魚の棚ともいふ」とあって、中巻所載の「御城下惣図」に拠れば、往還通り（東海道筋）十一町の一つである片町（かた)の西側に、宮通・職人町・油町・南魚町の順で、脇町四町が平行して並んでいた。また、同書は「油町」の項に続けて「清水旧宅」の一項を設け、「油町東側にあり。貞享・元禄の比の博識の儒医なり。姓は清水、名は春流、釣虚子と号す。尾州名古屋の産にして当所油巷に住宅す。寛文の頃より元禄年中迄、桑名に止住せられしと見へたり。生涯著述の書多し。元禄撰の書籍目録に其名出て今尚世間に流布す。徒然草新註四、続徒然草四、釣虚随筆、桑名百詠一、心学百詠一、其余略之」と記し、『桑名百詠』より「自那古野移家乎桑名」の一首を引いている。○吸月堂 清水春流の室号。春流に「吸月堂記」（『釣虚弄筆』所収）があり、それに拠れば、「吸月」の語は、蘇軾の「月夜に客と酒を杏花の下に飲む」詩（『古文真宝』前集卷中）に「君に勧む且つ杯中の月を吸へ」とあるのに基づく。

志学の十五の時から、耳順の六十の年に至るまで、儒服をき、包みを肩にし笠をかぶって、各地を遊覧し、あちこちをとめどなくさすらった。心は酒に酔ったようにいまだ煩惱から醒めていない。物の見方は粗雑で、思いは浮つき、心は結ばれ、口は世塵にまみれて、遊説のくらしに厭き、年老いて那古野に帰って来た。尾張は、父母の郷里の地である。これから、心を恬淡無欲の境地に遊ばせ、氣を空漠静寂の世界に合わせ、盃中に月影をひたし、窓辺に茶を煮

て、何事も自然なあり方に従つて天命を楽しみ、安らかな境涯を求めて余生を保とうとしたのである。ところが、あにはからんや、また川を渡つて桑名にやつて来て、髪白く皺だらけになるまで、なんと市中に住まう破目にならうとは。思いも寄らぬことに、しばしばうらはずかしく思い、ひとり苦笑している。さりながら、古えより聖賢が道のため人のために、長年にわたつて諸方を放浪した例は、やはり少なくない。いつたいどうして恥じ入ることがあろう。若いころからふだん儒者の行ないを身につけ、志を深く経伝に潜め、文学歴史に専心して、学問に勉め余裕のあるときは、風雅の集いにのぞみ、詩文の会に加わつて、文辞の意味内容を玩味し、細やかな味わいを咀嚼して、陶淵明・柳宗元の恬淡簡古な詩風を敬慕し、孟郊・賈島の高遠寒瘦たる詩境を希求している。つねづね華美で上っ面だけの世俗の利益を白眼視してきたが、かといつて道德の内実を究めることには愚図であつた。とはいへ、はつきりと身の程を弁え足ることを知つておれば、この上さらに何を求めることがあろう。近頃、わが門下に遊ぶ書生が申すのに、「先生は、講義の余暇に興に乗じて丘に登り景色を詠じ、川を眺めて風月を賞でておられます。その詩稿を囊中にしまい込んだまま奥深く蔵しているのは、なんともけちくさいことではありませぬか。どうしてわれわれ初学の徒のために一つ残らず世にお出しにならないのですか」とのこと。そこでやつとその気になり、楮先生を引き寄せ、石居黙を招き、十八公に言いつけ、尖頭奴を走らせて、書生の言葉に従ふこととした。今となつては、ほぞをかむしだいが、かくてついに世に誇りをのこす破目となつたのである。

時に元禄紫方の年春日

尾陽の陋儒清水春流仁、敬んで桑名の油巷吸月堂に題す

桑名百詠詩章

尾陽 釣虚子

○釣虚子 清水春流の別号。寛文九年（一六六九）刊『釣虚三編』の自序に、その由来について、「自ら釣虚散人と称す。釣虚の字は諸（れ）を大（太）公望が伝より採る。虚空に面（か）つて以つて釣魚し、以て魚を求むるに意無きの謂なり。散人は莊子の人間世に諸（れ）有り。世に用ひられざるの人なり。我が名の由つて来たる所なり」と述べている。

太平

海内百年弭<sup>ヤム</sup>二戰塵<sup>ヲ</sup>。太平無<sup>シ</sup>二國<sup>トシテ</sup>。不<sup>ト云コト</sup>レ遊<sup>ニ</sup>レ春。山行水宿乾坤眼。竹屋松窓翰墨身

太平

海内百年 戰塵を弭む。／ 太平 国として春に遊ばざるといふこと無し 山行水宿 乾坤の眼 竹屋松窓

翰墨の身

○百年 大坂夏の陣後、元和偃武の年からの概数。元禄三年まで實際は七十六年。○山行水宿 山を行き水辺に宿す。例えば、中

唐の皇甫冉「陸澧・郭勛を送る」詩に「秋風何れの処にか年を催すこと急なる、偏へに逐ふ山行水宿の人」と。○乾坤 天地。

○竹屋 竹造りの家。陋屋をいう。○松窓 松の木に面した窓。例えば、白居易の「琴に対して月を待つ」詩に「竹院新晴の夜、

松窓未だ卧せざるの時」と。

○五言絶句 韻字 塵・春・身（上平一真）

我が邦は、この百年、戰塵やみて天下泰平。諸国では、この世の春を謳歌せぬものはない。わしはと言えば、山を行き水辺に宿してこの眼で天地を見究め、竹屋松窓の下、文筆稼業の身を寄せている。

武陵、繁盛

日富年華 ミ、ニハナヤカナリ 日本東。武陵、榮艷萬家同。安<sub>シ</sub>民<sub>ヲ</sub>和<sub>テ</sub>衆<sub>ヲ</sub>囊<sub>シ</sub>弓矢<sub>ヲ</sub>。日富年華 ニ、ミナリ 日本東

武陵の繁盛

日々に富み年々に華かなり日本の東 / 武陵の榮艷 万家同じ / 民を安んじ衆を和して弓矢を囊し / 日々に富み年々に華かなり日本の東

○武陵 江戸。武蔵国に因んで中国風にいう。なお、津阪孝緯（二七五七一八二五）の『夜航詩話』巻四に「詩家の武蔵を称して武昌・武陵と為すは、尤も不倫と為す」という批判がある。○日富年華 『陳書』及び『南史』の徐陵伝に「今、衣冠礼楽、日に

富み年々に華かなり」と。○日本東 語は、杜甫の「王宰の画ける山水の図に戯れに題する歌」（『古文真宝』前集巻下）に「巴陵洞庭日本の東、赤岸の水は銀河と通ず」と見える。ここでは、わが国のこと。日東も同じ。○榮艷 繁榮して豊かであること。○

安民和衆 民衆を安んじ政治を安定させる。『左氏伝』宣公十二年に、楚子（莊王）の言葉として「夫れ武は暴を禁じ兵を戢（とど）め、大を保ち功を定め、民を安んじ衆を和し、財を豊かにする者なり」と見える。○囊弓矢 弓矢をふくろにしまいこむ。戦さをやめること。『詩経』周頌・時邁に載（は）ち干戈を戢（とど）め、載ち弓矢を囊す」と。囊は、音カウ。囊は、タク。別字だが、通用する。

○七言絶句 韻字 東・同・東（上平一東） なお、この詩は、首尾吟（詩の首句と尾句とが同一）の体をとる。

日々に富み年々賑う日の本の国。なかんずく江戸の繁盛ぶりは、万戸いずこも同じ。民を安んじ衆を和し弓矢をふくろにしまいこんでから、日々に富み年々賑う日の本の国。

桑名、城

東 接<sup>ノ</sup>滄瀛<sup>リ</sup> 北 縹<sup>ニ</sup>川<sup>ハ</sup>。西山積<sup>テ</sup>翠<sup>ヲ</sup> 浪<sup>ハ</sup>滔<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>。孤城依<sup>テ</sup>舊<sup>ニ</sup> 飛<sup>フ</sup>空裏<sup>ニ</sup>。湓<sup>イ</sup>蕪<sup>ワ</sup>通<sup>ス</sup>潮<sup>ヲ</sup> 古岸<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>  
桑名の城

東のかた滄瀛<sup>さうえい</sup>に接<sup>つらな</sup>り 北は川に縹<sup>まぐろ</sup>す / 西山翠を積みて 浪 天に滔<sup>はげ</sup>る / 孤城 旧に依つて空裏に飛ぶ  
湓<sup>いっせん</sup>蕪 潮を通ず古岸の前

○滄瀛 あおうなばら。大海。 ○縹川 ここでは、川を枕とするの意に用いるが、これは誤まり。『文選』卷四十六、顔延之の「三月三日曲水の詩の序」に「靚粧藻野、絃服縹川」とあり、寛文版は「川を縹<sup>らまだ</sup>」にす」と訓ずる。「マダラ」を「マクラ」と読み誤ったことによるのであらう。なお、本来、「縹」は、いろどりかざる意である。 ○積翠 緑がおい茂っていること。例えば、『文選』

卷二十二、顔延之の「詔に応じ北湖の田収を観る」詩に「攢素既に森藹たり、積翠亦葱芊たり」と。 ○滔天 浪が天にとどくほどの勢いで溢れはびこること。『尚書』堯典に「蕩蕩として山を懷き陵に襄<sup>ほの</sup>」り、浩浩として天に滔<sup>はげ</sup>る」と。 ○孤城。ぼつんと一つそびえる城。「城」は、中国ではまちの意だが、ここでは、しろ。 ○依舊 昔ながらに。 ○空裏 そら、空中。 ○湓蕪 湓は、「溢」字の訛りであらう。湓にイツの字音はない。湓は、あふれる。蕪は、ひたす。

○七言絶句 韻字 川・天・前（下平一先）

東は海に接し、北は川をまぐらとしてゐる。西の山は緑おい茂り、沖つ白浪は天にとどかんばかり。城は昔ながらの姿で大空に翔くように聳え、古えより変ることなく潮がひたひたと岸边を洗っている。

春日宮<sup>カスガノミヤ</sup> 在<sup>ハ</sup>二平肆中<sup>ニ</sup>。其巷<sup>ヤ</sup>俗言<sup>ニ</sup>宮通<sup>ト</sup>

神明<sup>ハ</sup> 柔惠直<sup>ナリ</sup>。拜起仰<sup>ヲ</sup>二春宮<sup>ニ</sup>。反宇騰<sup>ノ</sup>二江介<sup>ニ</sup>。端門倚<sup>ル</sup>二市中<sup>ニ</sup>。地靈<sup>ニシテ</sup> 人致<sup>シ</sup>敬<sup>ヲ</sup>。林密<sup>ニシテ</sup> 鳥吟<sup>ス</sup>風<sup>ニ</sup>。千古海西土<sup>ノ</sup>。  
只寧<sup>カクバカリヲノシミナリ</sup> 思樂豐

春日の宮は肆中に在り。其の巷を俗に宮通みやどおりと言ふ

神は明なり柔恵直 / 拝跪 春宮を仰ぐ / 反宇 江介に騰のぼり / 端門 市中に倚る / 地霊にして 人敬を致し / 林密にして 鳥 風に吟ず / 千古 海西の土 / 只寧かくばかり たのしみ 思樂豊かなり

○春日宮 春日神社。実は桑名の総鎮守としての桑名宗社のこと。桑名宗社は、桑名神社と中臣神社の総称。俗に中臣社の通称をとつて春日神社とも呼ばれている。『久波奈名所図会』中巻「桑名神社」の項に、「宮通・本町の間、西側にあり」とあり、宮通に東面してあつた。○肆中 市中。○宮通 桑名城下脇町十九町の一つ。『久波奈名所図会』中巻「宮通」の項に、「春日社楼門の前南への通り筋なり。旧名峠町と云。老人の口伝にあり。旧記に出るを見す。当町古へより塗師の家多し」と記し、『桑名百詠』よりこの詩を引く。○神明 あらたかな神。『易』説卦伝に「昔者聖人の易を作るや、神明に幽賛して蓍を生ず」、「尚書」君陳に「至治の馨香、神明を感ぜしむ」とある他、『礼記』祭統篇、「左氏伝」等に見える。○柔恵直 柔順にして中正。『詩經』大雅・崧高に「申伯の徳、柔恵にして且つ直」と。○春宮 春日宮のこと。なお、中国では、東宮・皇太子の意。○反宇 高くそびえて、先が反り返っている軒。『文選』卷一、班固の「西都の賦」に「反宇を上げて以て蓋戴し、日景を激して光を納る」、同じく卷二、張衡の「西京の賦」に「反宇業業たり」と。○江介 揖斐川沿いの地。もと、長江一帯の地を指す。『楚辭』九章・哀郢に「江介の遺風を悲しむ」と。○端門 宮殿の正門。ここでは、春日神社（桑名宗社）の楼門をいう。『久波奈名所図会』中巻所載の「春日社往古図」には、りっぱな楼門が描かれている。しかし、元禄十四年（一七〇二）に焼失、正徳元年（一七一二）に再建されたのははじめ、計三度の焼失・再建が繰り返されたが、寛政九年（一七九七）にまた類焼し、『久波奈名所図会』が書かれた当時は見ることができなかった。○地霊 境内のくすしく神々しいこと。『文選』卷二十一、顔延之の「車駕の京口に幸して蒜山に侍遊せしときの作」に「園畧には方の望を極め、邑社には地の霊を摠とむ」と。○致敬 敬意を尽くす。『礼記』祭儀篇に「是を以て其の敬を致し、其の情を発し、力を竭して事に従ひ、以て其の親に報ゆ」とある他、『左氏伝』「孝經」に見える。○千古 古えより遠い後世に至る



まで。○海西土 桑名の地をいう。桑名は伊勢湾内奥部の西側に位置する。ちなみに、中国で「海西」と言えば、大秦国（ローマ）や西域の地を指した。○只寧 近世の俗語。只恁、直恁と同じ。○思楽 『詩経』魯頌・泮水に「泮水を思楽す、薄（さいさ）か其の芹を采る」と。なお、思を助字とし、「ここに」と訓ずる説もある。

○五言律詩 韻字 宮・中・風・豊（上平一東）

祭神はあらたかによく人々の願いを聴き入れ、分けへだてなさない。拝跪して神殿を仰ぐと、竟は川沿いの町に聳え、楼門は市中に寄り添うように立っている。くすしき境内に人々はうやうやしく参拝し、木々の密生した森蔭から鳥の囀りが風に乗って聞えて来る。古えよりずっと変ることなく、この海西の地はかくも楽しみあふれている。

游<sup>フ</sup>濱<sup>ハ</sup>地蔵<sup>ニ</sup>

流観<sup>タ</sup>緩<sup>テ</sup>立<sup>ハ</sup>弄<sup>ニ</sup>歸潮<sup>ヲ</sup>。北岳垂<sup>テ</sup>天<sup>ニ</sup>南海遼<sup>カナリ</sup>。漁父<sup>ヒコフツ</sup>拏<sup>レ</sup>舟<sup>ヲ</sup>遊客散<sup>ス</sup>。白鷗<sup>チ</sup>樂<sup>テ</sup>水<sup>ヲ</sup>浪中<sup>ニ</sup>漂<sup>フ</sup>。

浜の地蔵に遊ぶ

流観緩く立って帰潮を弄べば / 北岳 天に垂れて 南海遼かなり / 漁父 舟を拏<sup>ひこつ</sup>って遊客散ず / 白鷗  
水を楽しみて浪中に漂ふ

○濱地藏 龍宮山地蔵院の通称。桑名城外桑名郡赤須賀村の東堤にあった。本尊は地藏石像。『久波奈名所図会』下巻所載の「浜地藏・富士山眺望」の図には、数株の松樹に囲まれて本堂、常夜燈、白魚塚が立つ境内で、伊勢の海を前にして、遠く富士山や朝熊山を眺めて遊興している数人の男女の姿が描かれている。桑名近郊の景勝の地で、人々の遊樂の地であった。また、同「竜宮山地蔵院」の項に、『桑名百詠』よりこの詩を引いている。○流観 見わたす。『楚辞』九章・哀郢に「余が目を曼（と）くして以て流観す」と。○緩立 のんびりと立っているという意か。珍しい言い方。○歸潮 引き潮。『文選』卷二十一、謝靈運の「京口の北固に

從游して詔に応ず」詩に「組(とば)を張りては倒景を眺め、筵を列ねては帰潮を矚(み)る」と。○北岳 北方に連なる養老山系の

山々。○垂天 空いっぱい広がる。『莊子』逍遙遊篇に「垂天の雲」とある。○南海 南方に広がる伊勢の海。○漁父 老

漁父。父は、老人の称。『楚辭』に「漁父の辭」があり、中国の詩文に用いられると、隱者のイメージが伴う。○桴舟 舟を浜に

引き上げる。桴は、桴と同じ。牽引の意。北宋・黃庭堅の「宋宗儒の摘阮歌を聴く」詩に「漁父舟を桴つて葭葦に在り」と。○白

鷗 白いかもめ。かもめは、これを捕えようとする下心のある人間には近づかないという（『列子』黃帝篇）。そこから、自由人の象

徴として用いられる。例えば、杜甫の「韋左丞に贈り奉る二十二韻」詩（『古文真宝』前集卷上）に「白鷗浩蕩に波せば、万里誰か能く馴れん」とある。

○七言絶句 韻字 潮・遼・漂（下平二蕭）

のんびりと佇んであたりを眺め、引き潮と戯れていると、北には山が天空より垂れて迫り、南には海が果てしなく広がっている。やがて年老いた漁師が舟を浜に引き上げて帰り仕度を始め、遊客も散り散りに去っていった。今では白い鷗だけが楽し気に波間に漂うばかりだ。

慕ニ走井山ニ題ニ勸學寺ニ

鳥噪ニ簷間ニ山更ニ幽ニ。松杉林外碧雲流ル。盤ニ游ニ飛闌ニ一日西瘦ニ。磅ニ坤ニ掃ニ客愁ニ

走井山に慕ニって勸學寺に題す

鳥簷間ニに噪ニいで 山更ニに幽なり / 松杉林外 碧雲流る / 飛闌ニに盤游すれば 日 西に瘦す / 乾坤ニを磅ニ

礴ニして客愁ニを掃ニふ

○慕『古今韻会舉要』に『集韻』を引いて「慕は、登なり」という。○走井山・勸學寺 走井山は、桑名城外西南に位置する小丘。

町屋川（現、員弁川）を俯瞰し、桑名の城外や伊勢の海を眺めることのできた景勝の地。山上に走井山勧学寺がある。「久波奈名所図会」中巻所載の「走井山」の図には、数株の桜樹に囲まれ、本堂・太子堂・鐘樓などがあるほか、水茶屋もあって、参詣や遊樂する多数の男女の客の姿が描かれている。また、同「走井山勧学寺」の項に、『桑名百詠』よりこの詩を引いている。○簷間 軒端。○山更幽 梁・王籍の「若耶溪に入る」詩に「蟬噪しうして林逾（こ）いよ静かに、鳥鳴いて山更に幽なり」と。○碧雲 青空にくっきりと浮かぶ雲。○盤遊 楽しみ遊ぶ。『尚書』五子之歌に「乃ち盤遊度無し」、『文選』卷十五、張衡の「埽田の賦」に「盤遊の至樂を極め、日は夕べなりと雖も劬（つ）るるを忘る」と。○飛闌 樓上に張り出している方木のはり台に出るための小門。樓上の小門。『文選』卷一、班固の「西都の賦」に「飛闌を排（おし）いて上り出づれば、目を天表に遊ばしむるが若く」云々とあり、卷二、張衡の「西京の賦」に「飛闌に上りて仰ぎ眺めれば、正に瑤光と玉繩とを睹（み）る」と。○日西瘦 日が西に傾き光が薄らいでゆく。李雲岩の「呉江を過る」詩（『聯珠詩格』卷二）に「呉雲地に黏して日西に瘦す」と。○磅礴 渾然一体となる。双声の語。旁磳も同じ。『莊子』逍遙遊篇に「將に万物を旁磳して以て一と為さんとす」とあり、南宋・陳与義の「趙虚中、石有り。小華山と名づく。詩を以て之を借る」詩に「磅礴たる乾坤 氣象横たふ」と。○乾坤 天地。

○七言絶句 韻字 幽・流・愁（下平十一尤）

鳥が軒端に囀って、山中はいちだんと奥深く静かに感じられる。松や杉の木立ちの上を雲が流れ、高樓に登って眺めをほしいままにしていると、日はいつしか西に傾き光も薄らいでゆく。やがて、天と地とが一つに融け合い、流寓の身の愁いを一掃してくれた。

桑名 長嶋 隔河。其間里程。乗時吟行 看景。

鳥翊 桑江曲。魚跳 長嶋流。魚翁歸 問酒。耕叟待 乘舟。縦目 乾坤大。盪胸 雲水悠。隨意發

孤嘯<sup>ヲ</sup>。盱衡<sup>シテ</sup> 好步游<sup>スルニ</sup>

桑名と長島と河を隔つ。其の間里程。時に乗じて吟行して景を見る

鳥は翺<sup>と</sup>ぶ桑江の曲<sup>はら</sup> / 魚は跳<sup>は</sup>る長島の流れ / 魚翁帰<sup>かへ</sup>つて酒を問ひ / 耕叟<sup>かう</sup>待つて舟に乗る / 目を縦<sup>ほし</sup>ま  
にすれば乾坤大なり / 胸を盪<sup>あ</sup>つて雲水悠<sup>なが</sup>し / 随意に孤嘯<sup>こ</sup>を發して / 盱衡<sup>く</sup>して好し歩游<sup>ほ</sup>するに

○長嶋 伊勢国桑名郡のうち。江戸時代、長島藩の城下町があり、当時は松平氏の治下。現、三重県桑名郡長島町。 ○其間里程

『久波奈名所図会』上巻所載の「海陸行程図」に拠れば、長島は桑名の北方一里。 ○吟行 詩を吟じながら歩く。 ○鳥翺・魚跳

の二句 触目の景であるとともに、『詩経』大雅・旱麓に「鳶は飛んで天に反<sup>ひ</sup>り、魚は淵に躍<sup>を</sup>る」とあるのを踏まえ、鳥魚それぞれがその性にしがたがって自由に楽しんでいることを象徴する。 ○桑江・長嶋流 「桑江」は、桑名川の漢語的表現。当時、木

曾川水系の木曾・長良・揖斐の三川は下流で水脈が通じており、美濃国中島郡小藪村（現、岐阜県羽島市桑原町小藪）地先で長良川と合流した木曾川は、伊勢国桑名郡油島村（現、岐阜県海津町油島）地先で揖斐川と一つになり、下流で再び二筋に分かれて流れて

いた。その本流は桑名側を流れ、これを桑名川と称した。傍流は鱚江川と称し、長島を横断して再び本流に流れ込んでいた。「長嶋流」とは、対岸の長島側を流れる傍流を指すのであろう。〔海津町史 通史篇上〕第二章第二項「江戸時代の治水工事」参照。 ○漁翁

年老いた漁師。 ○耕叟 老農夫。 ○縦目 心ゆくまで眺望する。杜甫の「哀州の城樓に登る」詩に「東郡庭を趨<sup>は</sup>る日、南樓

目を縦にするの初」と。 ○乾坤大 杜甫の「野望」詩に「納納として乾坤大なり、行き行きて郡国遙かなり」と。 ○盪胸 胸中

を洗いすすぐ。杜甫の「岳を望む」詩に「胸を盪つて層雲を生じ、皆<sup>ことごと</sup>を決<sup>き</sup>いて帰鳥に入る」とあり、明・邵傳『杜律五言集解』には「盪は、滌なり」と注する。 ○孤嘯 ひとり詩を吟ずる。嘯は、声を長くひいてうたうこと。 ○盱衡 目をみはり、眉

をつりあげる。双声の語。

○五言律詩 韻字 流・舟・悠・游（下平十一尤）

鳥は桑名川のくまの上を飛び、魚は長島の流れに跳ねている。一仕事終えた漁師の爺さんは一杯ひっかけるべく家路を辿り、老いた農夫は迎えの舟が来るのを待っている。心ゆくまで見渡せば天地はひろびろと広がり、雲と水とがはろばろと連なつて胸中をすっかり洗い清めてくれる。一人気ままに詩を吟じながら、このすばらしい風景を堪能すべくしかと目をみひらいて歩き回ろう。

曾子<sup>ノ</sup>一唯老子<sup>ノ</sup>愚。搖<sup>シテ</sup>唇益<sup>ヲ</sup>耻<sup>シテ</sup>趙州<sup>ヲ</sup>無。天心<sup>ノ</sup>明月山間<sup>ノ</sup>月。依<sup>レテ</sup>舊松風每<sup>ニ</sup>自如<sup>ナリ</sup>。

曾子の二唯　老子の愚　／　唇を揺して恥を益して趙州の無　／　天心の明月　山間の月　／　旧に依つて松風毎つねに

○贅疣 こぶといぼ。余計な無用の物の喩。『莊子』大宗師篇及び駢拇篇に見える。

○曾子 孔子の弟子、曾参のこと。

○一唯

ただ一言、はいと答える。『論語』里仁篇に「子曰く、参よ、吾か道は一以て之を貫く。曾子曰く、唯。子出づ。門人問ふ、曰く何の謂ぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ」とあるのに基づく。王秋江の「戯れに爲る」詩（『聯珠詩格』卷四）に「惜しむ可し参や一唯を多とするを、如かず回や只だ愚の如くなるには」と。○老子愚 無爲自然を尊び巧智を排した老子の思想をかくいう。

『老子』に「愚」の字が用いられる例として、例えば第二十章に「我は愚人の心なるかな」とある。つまらぬことを喋べる。『莊子』盗跖篇に「臂を揺ユかし舌を鼓し、擅シマヒに是非を生ず」と。○趙州 唐末の禪僧、趙州從諗しん ○搖唇 くちびるを動かす。

(七七八・八九七)のこと。その語録に『趙州録』がある。彼が「狗子に還またた仏性有りや」という問いに対して「無し」と答え、た話は有名で、『無門関』第一則の公案として引かれている。○天心 天空のまんなか。○明月・松風 清澄なもののお喩。○

○天心　天空のまんなか。

○明月・松風

清澄なものゝ喩。

依旧 依然として、従来通り。○自如 もとのまま。泰然として。変わることはないさま。

○七言絶句 韻字 愚・無（上平七虞）・如（上平六魚）

曾子はただ一言はいとのみ答え、老子は愚なる生き方を貫いた。私はつまらぬことを喋りちらしており、無とだけ言つた趙州從諗に対して恥をますばかりだ。彼らの境地を例えてみれば、中天にかかる明月や山間の月であつて、清々しい松風がゆつたりと変ることなく吹いているのだ。

耽<sup>ス</sup>著 詩書<sup>ニ</sup>

耽<sup>シテ</sup>著 詩書<sup>ニ</sup> 畫<sup>ニ</sup> 闔<sup>レ</sup>門<sup>ヲ</sup>。隱<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup> 甘<sup>サ</sup>レ寂<sup>ヲ</sup> 自<sup>ラ</sup>無言。雖<sup>モ</sup>三然<sup>ニ</sup> 風竹<sup>ノ</sup> 閑<sup>ニ</sup> 庭際<sup>ニ</sup>。日暮<sup>シ</sup> 鳥歸<sup>ル</sup> 獨樂園

詩書に耽著す

詩書に耽著して昼も門を闔<sup>と</sup>づ ／ 身を隠し寂を甘んじて自ら無言 ／ 風竹 庭際に閑<sup>さへが</sup>しと雖然<sup>いへど</sup>も ／ 日暮れ鳥歸る 独樂園

○耽著 ふける。著は、状態の持続を示す助字。

○闔門 門を閉ざす。

○風竹 風にそよぐ竹。

○独樂園 北宋の司馬光（一

〇一九一〇八六）が宰相を罷めて後、洛陽に作つた庭園の名として知られ、司馬光に「独樂園記」（『事文類聚』統集卷九）、蘇軾に「司馬溫公独樂園詩」（『古文真宝』前集卷上）があるが、ここでは、春流の住居の庭を指す。なお、「独樂」の語は、『礼記』樂記篇に「独り其の志を楽しみて、其の道を厭はず」、「孟子」梁惠王篇下に「独り樂<sup>が</sup>して樂しむ」とあるのに出ず。

○七言絶句 韻字 門・言・園（上平十三元）

詩作や読書に没頭して昼間から門をとざしたまま。世間から身を隠し寂漠の境地に甘んじて何も言わずにいる。風にそよぐ竹の葉浪が庭先にざわめいているが、独り楽しむわが園生もやがて日暮れて鳥が時に帰ってゆく。

賣<sup>ル</sup>文<sup>ヲ</sup>

南北東西來去忙<sup>シ</sup>。幅巾藜杖賣<sup>ツ</sup>文章<sup>ヲ</sup>。松床莞席清貧<sup>ヲ</sup>老。千首詩堆<sup>シテ</sup>飽<sup>マテ</sup>吐<sup>ク</sup>芳<sup>ヲ</sup>。

文を売る

南北東西 來去忙し / 幅巾藜杖<sup>れいちやう</sup> 文章を売る / 松床莞席 清貧の老 / 千首詩堆<sup>うづたか</sup>くして飽くまで芳を

吐く

○売文 依頼に応じて詩文を作り、それによって報酬を得ること。杜甫の「斛斯六官未だ帰らずと聞く」詩に「本と文を売って活を為す、翻つて室をして倒<sup>しまか</sup>に懸らしむ」と。なお、春流には、「売文翁伝」と題する自伝的な文章がある（『釣虚弄筆』所収）。

○南北東西 各地をさすらうこと。東西南北に同じ。平仄の都合でかくいう。『札記』檀弓篇上に「今、（孔）丘や東西南北の人」、高適の「人日、杜二拾遺に寄す」詩（『古文真宝』前集卷中）に「愧づ爾<sup>なん</sup>東西南北の人」と。○幅巾 一はばの布で作った頭巾。

隠者のかぶりもの。○藜杖 あかぎの茎で作った杖。これも隠逸の士が用いる。○松床 松の木造りの長椅子。床は、牀と同じ。

ただし、ここでは松の木造りの粗末なゆか。○莞席 蘭<sup>きん</sup>で作った敷物。例えば、韓愈の「秀禪師の房に題す」詩に「橋は水松

に夾まって行くこと百歩、竹林莞席僧家に到る」と。○清貧 陶淵明の「貧士を詠ず」七首其七に「一朝吏を辞して帰る、清貧略

（は）儔<sup>ひた</sup>無し」と。○千首詩堆 白居易の「少年に問ふ」詩に「千首の詩青玉の案に堆く、十分の酒白金の盃に寫<sup>そそ</sup>ぐ」と。

○吐芳 佳句を吐く。韓愈・孟郊の「城南聯句」に「惟れ昔嘉詠を集め、芳を吐くこと鳴嚶に類す」と。

○七言絶句 韻字 忙・章・芳（下平七陽）

南北東西あたふたと往き來し、隠者の頭巾にあかぎの杖つく売文稼業。松の木の床に蘭のむしろしく貧乏爺、千首の詩がうずたかく出来上つても、あきることなく佳句を吐く。

衰老

十年三千六百日。光陰<sup>トシチ</sup>猝<sup>ル</sup>猝<sup>ニ</sup>。無<sup>シ</sup>術。顏<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>黃<sup>ノ</sup>葉<sup>ハ</sup>。髮<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>霜<sup>ノ</sup>。只<sup>チ</sup>慚<sup>ツ</sup>開<sup>ク</sup>口<sup>ヲ</sup>言<sup>フ</sup>一<sup>コトヲ</sup>隱<sup>ニ</sup>逸<sup>ヲ</sup>一

衰老

十年三千六百日。／ 光陰<sup>スウソウ</sup>猝<sup>ニ</sup>猝<sup>ニ</sup>として留<sup>ル</sup>むるに術無<sup>シ</sup>し。／ 顏は黃葉の如く 髮は霜の如し。／ 只<sup>ただ</sup>慚<sup>は</sup>づ 口を開いて隱逸を言ふことを

○十年 大坂で過した九年間を含む春流の五十代の十年間を指すのであろう。 ○光陰 月日。時間。 ○猝猝 速やかなさま。あ  
わただしいさま。宋・劉改之（遇）の「暮春」詩（『聯珠詩格』卷八）に「光陰猝猝一飛の梭、許（か）くの如き頭顱老いを奈何せん」  
と。

○七言絶句 韻字 日・術・逸（入声四質）

十年三千六百日、月日はたちまち過ぎ去り、留めるすべもない。顏は黃葉のごとくきばみ、髮は霜のように白くなつてしまった。とかく口を開けば隱逸を口走っていたのが全く恥しいかぎりだ。

心似<sup>タリ</sup>海<sup>ニ</sup>

安<sup>シ</sup>貧<sup>ヲ</sup>樂<sup>ハ</sup>道<sup>ヲ</sup>乾坤<sup>シ</sup>闊<sup>ニ</sup>。審<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>無<sup>レ</sup>求<sup>レ</sup>日月<sup>シ</sup>長<sup>シ</sup>。萬法<sup>ニ</sup>一心<sup>カナリ</sup>平<sup>ニ</sup>似<sup>ヨリセ</sup>海<sup>ニ</sup>。閑<sup>ニ</sup>看<sup>ル</sup>人世<sup>ノ</sup>百<sup>コトヲ</sup>家<sup>ヲ</sup>忙<sup>シ</sup>

心 海に似たり

貧を安んじ道を楽しめば乾坤闊し。／ 得ることを審かにし求め無ければ日月長し。／ 萬法一心 海よりも平らかなり。／ 閑に看る 人世 百家の忙しきことを



○安貧 陶淵明の「貧士を詠ず」七首其四に「貧に安んじ賤を守る者、古へより黔婁有り」と。○樂道 『淮南子』詮道訓に「道

を樂しみて貧を忘る、故に利、心を動かさず」と。○萬法一心 万法すなわち一切の事物は、すべてこの心一つにおさめられてい  
るということ。○似 比較の助字。○閑看 のんびりとながめる。例えば、羅隱の「偶興」詩（三體詩）卷一に「如今贏（か

ち得たり衰老を將（も）つて、閑に看る人間得意の人」と。○百家 多くの人々。

○七言絶句 韻字 長・忙（下平七陽）。起句は踏み落とし。

貧に安んじ道を楽しめば世界はひろびろ。得たものをはつきりと知り、外に求めることがなければ、月日はゆつたり。  
万法はわが心の中にあり、海よりも平らか。さてもこのんびりながめてる、この世間あたふた駆けずり回る人々を。

### 學<sup>ア</sup>二<sup>フ</sup>敲推<sup>一</sup>

遮<sup>サモアラハアレノ</sup>莫<sup>リ</sup> 人<sup>ヲ</sup>貪<sup>ム</sup>榮<sup>コト</sup> 嗜<sup>ヲ</sup>利<sup>ヲ</sup>。尚<sup>ナホ</sup>思<sup>ハシ</sup>二<sup>フ</sup>賈<sup>ツ</sup>嶋<sup>一</sup> 學<sup>フ</sup>二<sup>フ</sup>敲推<sup>一</sup>。新<sup>ニ</sup>聲<sup>シ</sup>妙<sup>ミョウ</sup>語<sup>コ</sup>味<sup>ミ</sup>方<sup>マタ</sup>永<sup>ニシ</sup>。白<sup>ハク</sup>壁<sup>ヘキ</sup>黃<sup>ワウ</sup>金<sup>キン</sup>心<sup>シン</sup>已<sup>ニ</sup>灰<sup>ス</sup>。

敲推を学ぶ

遮<sup>サモアラハアレノ</sup>莫<sup>リ</sup> あれ人の榮<sup>サカサマ</sup>を貪<sup>カガム</sup>り利<sup>リ</sup>を嗜<sup>カガム</sup>むこと

／ 尚<sup>ナホ</sup>賈<sup>ツ</sup>嶋<sup>一</sup>を思<sup>オモ</sup>ひて敲推<sup>カウイ</sup>を学<sup>マナブ</sup>ぶ

／ 新<sup>ニ</sup>聲<sup>シ</sup>妙<sup>ミョウ</sup>語<sup>コ</sup> 味<sup>ミ</sup>方<sup>マタ</sup>に永<sup>ニシ</sup>し

／ 白<sup>ハク</sup>壁<sup>ヘキ</sup>黃<sup>ワウ</sup>金<sup>キン</sup>

心已に灰ぬ

○敲推 推敲と同じ。中唐の詩人賈島（七七九〜八四三）が「僧推月下門」の句について、「推」を「敲」（<sup>カウ</sup>）と改めるかどうかで  
苦心した故事に基づく。『唐才子伝』卷五、賈島の条に見え、『書言故事』卷十一、文章類に「敲推」の項を載せる。○遮莫 六朝

以来の俗語で、たとえうであろうともの意。○貪榮 榮達を貪欲に求める。○嗜利 錢財をむさばる。○新聲 清新な詩。

○妙語 玄妙な語。妙は、妙と同じ。○白壁 白玉。○心已灰 心がすでに灰のように冷え切っている。『莊子』齊物論篇に「心

固より死灰の如くならしむ可し」、宋・曾茶山（幾）の「僧廬」詩（聯珠詩格）卷十七に「頭白の高僧心已に灰す」と。

○七言絶句 韻字 推・灰（上平十灰）。起句は踏み落とし。

よし世間の人々が栄達を貪り求め錢財を好んで追いかけてようと、それでも賈島を尊崇して推敲の苦心を学ぶ。その清新な詩句や玄妙な語は味わい深いものであり、私にとって白玉や黄金を重んずる心はもはや灰となつて消えているのだ。

雨中 偶作

鳥韻風聲春晝長。閑窓細雨鼠思郷。載書囊筆倦游手。限柳傍桃悲別腸。江北家兒花濺淚。  
海南田叟月侵牀。小根淺器貧如許。媿我醉心名利場。  
鳥韻風聲 春晝長し / 閑窓細雨 鼠く郷を思ふ / 書を載せ筆を囊にして游手に倦む / 柳に隈ひ桃に傍ひ  
て別腸を悲しみ / 江北の家兒 花にも涙を濺ぎ / 海南の田叟 月 牀を侵す / 小根淺器 貧如許 /  
媿づ我れ心を名利の場に酔はしむることを

○鳥韻 鳥の囀り。○春晝長 白居易の「牡丹芳」詩に「殘鶯一聲春日長し」と。○閑窓 佗が住まいの窓辺。○鼠思 『詩經』

小雅・雨無正に「鼠思泣血、言つて疾まざる無し」とあり、鄭箋に「鼠は、憂なり」、朱子の集伝に「鼠思は、猶ほ癡憂と言ふがことなり」と注する。○載書 書物を車に載せる。○囊筆 筆を袋にしまいこむ。○游手 手を遊ばせる。為すこともなくぶらぶら暮らすこと。○隈 隈と同じ。もたれる。よりそう。例えば、寒山詩に「牆に隈（こ）ひて蝴蝶を弄び、水に臨んで蛾蟬を擲つ」と。

○別腸 惜別の心。例えば、韓愈・孟郊の「遠游聯句」に「別腸車輪転じ、一日一周」と。○江北家兒 江北は、木曾・

長良・揖斐の三川が合流した大河の北に位置する名古屋の地をいう。家兒は、家の子供。春流が名古屋より桑名に移住するに際して、一時家族を名古屋に残してきたのであろうか。あるいは、家兒は長男の仁のことを指し、その長男だけが親元を離れて名古屋の地に

あつたものか。俟考。 ○花濺淚 杜甫の「春望」詩に「時に感じて花にも涙を濺ぎ、別れを恨みて鳥にも心を驚かす」とあるのに

よる。 ○海南田叟 海南は、伊勢湾の内奥部を隔て、名古屋より南方に位置する桑名の地をいう。田叟は、田舎爺。春流自身を指

す。 ○月侵牀 賈島の「南齋」詩（『瀛奎律髓』卷二十三）に「簾は巻く牀を侵す月、屏は遮る座に入る風」と。 ○小根 仏教

語で、小乗の機根の者。 ○浅器 資質能力に乏しい生まれつき。 ○如許 如此と同じ。そこから転じてこのように多くのという

意を生じ、わが国の古訓で「ソコバク」と訓ずる場合がある。 ○名利場 血まなこになって名声利益を追い求める競争場。白居易

の「常楽里閑居」詩に「帝都は名利の場、鷄鳴安居すること無し」と。

○七言律詩 韻字 長・郷・腸・牀・場（下平七陽）

鳥の囀りが風に乗つてのどかに聞えて春の昼は長く、ひっそりとした窓辺にこぬか雨そぼふりて、切ないまでに故郷のことが思われる。書物を車に載せ筆を袋に入れて各地を転々とする無為徒食の世渡りには、ほとほと嫌気がさした。柳端や桃樹の傍で幾度となく別れに心を悲しませたものである。それにしても川の北にいる吾子は父を偲んで花にも涙をそそいでいることだろう。海南の地に住むこの田舎爺は日がな一日思いにふけていると、いつしか月の光が床にさしこんでいる。いまだに悟りを開けずにいる浅はかな身の上で、貧乏きわまらない。名声や金銭を追い求める修羅場に心奪われていたのが、今更ながらにうらはずかしい。

### 冬山 晩歸

冬山新<sup>ニ</sup>瘦<sup>テ</sup>鳥孤<sup>リ</sup>飛<sup>フ</sup>。松竹後<sup>レ</sup>彫<sup>ム</sup>。紅葉稀<sup>ナリ</sup>。無<sup>レ</sup>酒無<sup>レ</sup>明游興少<sup>シナリ</sup>。紗巾竹杖獨<sup>コ、ニ</sup>于<sup>ル</sup>歸。

### 冬山の晩歸

冬山新<sup>あた</sup>に瘦<sup>へ</sup>せ 鳥孤<sup>ひと</sup>り飛<sup>と</sup>ぶ / 松竹彫<sup>しほ</sup>むに後<sup>おく</sup>れて紅葉稀<sup>まれ</sup>なり / 酒無<sup>な</sup>く明無<sup>な</sup>く 游興少<sup>まれ</sup>なり / 紗巾竹杖

ひとり子に帰る

○冬山新瘦 初冬、樹木の大半が落葉して山全体が瘦せたように見えることをいう。新は、ししたばかりの意。南宋・陳与義の「周教授の秋懷に次韻す」詩に「天機充允として山新たに瘦す」と。○松竹後彫 松や竹だけが冬も色を変えずにいる。『論語』子罕篇に「子曰く、歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後（お）るを知るなり」と。彫は、凋と同じ。○無明 明は、あるいは朋の訛字か。俟考。○紗巾 薄絹の頭巾。夏用のもの。○手歸 手を「ここに」と訓ずる例は、『詩経』に散見する。

○七言絶句 韻字 飛・稀・歸（上平五微）

冬枯れて瘦せてみえる初冬の山に鳥がつかれもなく一羽で飛んでいる。松や竹はあおおとそのままの姿を保っているが、紅葉はすっかりまばらになってしまった。酒もなく明かり（友？）もなく、興趣も少ない。薄絹の頭巾をかぶり竹の杖をついてひとり帰ってきた。

今日出頭

今日出<sup>シテ</sup>頭<sup>ノ</sup>塵世<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>。豁然<sup>トシテ</sup> 明了<sup>スレハ</sup> 本來空<sup>ナリ</sup>。一心<sup>ニ</sup> 歸命<sup>ス</sup> 夢醒漢<sup>ノ</sup>。貝葉曇花<sup>カカツヘン</sup> 孰<sup>ツ</sup> 功

今日出頭

今日塵世の中に出頭して / 豁然として明了すれば本来空なり / 一心に歸命<sup>きみょう</sup>す夢醒の漢 / 貝葉曇花<sup>どんげ</sup> 孰<sup>いづれ</sup> 功<sup>いづれ</sup>を計<sup>かぞ</sup>へん

○出頭 衆人の前にまかり出る。顔を出す。○塵世 汚れた世の中。俗世間。○豁然 疑いや迷いがからりと晴れるさま。○明了 はっきりと悟る。○空 仏教語で、世の中のすべての事物事象は因縁によって生ずる仮りの姿であり、実体のないものであるということ。○歸命 自己の身命をさし出して仏に帰依すること。○夢醒漢 俗念から醒めた男。春流自身をいう。○貝葉

貝多羅葉の略。インド産の木の名。その葉が、経文を写すのに用いられたことから、仏典を指す。○曇花 優曇華の略。三千年に

一度花が咲き、その時には金輪王が出現するという伝説上の植物。

○七言絶句 韻字 中・空・功（上平一東）

今日、俗世間にまかり出で、豁然として悟つてみれば、本来すべては空なるものなのだ。大悟一番、夢から醒めたこのわしは、ひたすら仏法に帰依する。貝葉に書かれた経文や瑞兆を示す優曇華のおかげじゃあるまいて。

走亦樂<sup>ム</sup>下<sup>テ</sup>游<sup>ニ</sup>乎朝市<sup>ニ</sup>隱<sup>ル</sup>上<sup>レ</sup>塵<sup>ニ</sup>。時<sup>ク</sup>閑<sup>ニ</sup>步<sup>シテ</sup>海邊<sup>ニ</sup>。吐<sup>キ</sup>句<sup>ヲ</sup>移<sup>ス</sup>情<sup>ヲ</sup>。

行客都<sup>テ</sup>無<sup>シ</sup>レ<sup>フ</sup>弄<sup>モノ</sup>。晚暉<sup>ヲ</sup>。悠然<sup>トシテ</sup>新詠<sup>シテ</sup>恨<sup>ム</sup>喜微<sup>ヲ</sup>。儻<sup>ニ</sup>個<sup>モ</sup>宛<sup>レハ</sup>見<sup>ナリ</sup>桑江急<sup>ナリ</sup>。只有<sup>ニ</sup>漁舟<sup>ノ</sup>罷<sup>テ</sup>釣<sup>ヲ</sup>歸<sup>ル</sup>。

走亦た朝市に游んで塵に隠るることを楽しむ。時々海辺に閑歩して、句を吐き情を移す

行客都て晚暉を弄ぶもの無し / 悠然として新詠して喜微を恨む / 儻個<sup>せんぐわい</sup>宛も<sup>あたか</sup>見れば桑江急なり / 只漁<sup>ただ</sup>

舟の釣を罷めて帰る有り

○走 謙遜の自称語。僕。あるいは、「走りて」の意か。その場合は「亦」字が落着かない。○朝市 町中。○隱塵 市塵に隠れる。俗世間の中に身を隠す。○移情 心情を寄せる。○弄 めでる。○晚暉 夕日。○悠然 ゆつたりとしたさま。のんびりとしたさま。○新詠 新作の詩を吟詠する。○喜微 光のかすかなさま。疊韻の語。陶淵明の「帰去來の辞」(『文選』卷四

十五、『古文真宝』後集卷一)に「征夫に問ふに前路を以てし、晨光の喜微なるを恨む」と。○儻個 たたずむさま。うろうろする。○楚辞 九章・涉江に「涂浦に入りて余(中)儻個し、迷ひて吾れ如(中)く所を知らず」と。○宛 釈大典(二七一九一八〇一)の『文語解』に「マサニ」の訓を付し、『詩経』秦風・兼葭に「宛として水の中央に在り」の毛伝に「坐ながら見る貌」と注するのを引いて、「恰ノ字ト同用スルコトアレドモ、宛ハマノアマリライフ辞ナリ。恰・宛トモニ古来アタカモト訳ス」という。ここでは、

を引いて、「恰ノ字ト同用スルコトアレドモ、宛ハマノアマリライフ辞ナリ。恰・宛トモニ古来アタカモト訳ス」という。ここでは、

ちようどその時の意に用いる。○桑江 桑名川。前出「桑名長嶋隔河。其間里程。乗時吟行看景」詩の語釈参照。

○七言絶句 韻字 暉・微・歸（上平五微）

行きかう人々は、誰一人として夕日の美しさを賞でる者もない。そんな中、のびやかに新作の詩を吟詠しながら、陽光がしだいに微かになってゆくのを恨めしく思う。しばし佇んで見やれば、桑名川の流れは速く、折しも釣りをやめた漁師の小舟の帰って来るのが眼にうつるばかり。

染<sup>ル</sup>塵<sup>ニ</sup>

六十年來染<sup>テ</sup>世塵<sup>ニ</sup>。治心養氣乃<sup>シ</sup>全<sup>ス</sup>身<sup>ヲ</sup>。後生晚進妄<sup>リ</sup>推<sup>ス</sup>我<sup>ヲ</sup>。揮<sup>リ</sup>塵<sup>ヲ</sup>開<sup>テ</sup>談<sup>ヲ</sup>日日新<sup>ニナリ</sup>

塵に染る

六十年來 世塵に染つて / 治心養氣 乃<sup>いま</sup>し身を全うす / 後生晚進 妄<sup>みだ</sup>りに我を推す / 塵<sup>じゆ</sup>を揮<sup>ふ</sup>り談を開いて日日に新なり

○世塵 俗世間のけがれ。世上の俗事。『文選』卷三十一、江淹の「雜体詩」三十首其八に「志を潜めて世塵を去らんとす」と。

○治心 精神を治める。『礼記』樂記篇に「樂を致して以て心を治むれば、則ち易直子諒の心、油然として生ず」、『荀子』解蔽篇に「仁者の思は恭しく、聖人の思は樂しむ。此れ心を治むるの道なり」と。○養氣 浩然の氣を養う。心身の氣を養う。『孟子』公孫丑

篇上に「我れ善く浩然の氣を養ふ」と。○乃 「いまし」と訓ずるのは古訓。○後生 後輩の者。『論語』子罕篇に「後生畏る可

し」と。○晚進 後進。後輩。○揮塵 塵で作つた払子をふるう。論議に熱中するさま。晋代、清談の際に塵尾を取つて談話を

助けたことによる。○日日新 『大学』に「湯の盤の銘に曰く、苟<sup>も</sup>（<sup>も</sup>）に日に新にせば、日日に新に、又日に新なり」と。

○七言絶句 韻字 塵・身・新（上平十一真）

この六十年というものの俗世の塵にそまりながらも、精神を修め気を養ってどうやら身を全うすることができた。若い連中がむやみにこのわしを買い被ってくれて集まり、私子をふるいながら談議に熱中して日々新たな境地を開いていく。

行<sup>ニ</sup>東方<sup>一</sup>一游<sup>フ</sup>

分<sup>ニ</sup>離<sup>シテ</sup>煩惱<sup>ノ</sup>境<sup>ヲ</sup>一 吟笠<sup>ル</sup>到<sup>ニ</sup>東方<sup>一</sup>一 游<sup>ニ</sup>目山雲白<sup>一</sup>。慰<sup>ム</sup>心野水蒼<sup>一</sup>。鐘鳴<sup>テ</sup>知<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>寺。地凹<sup>ニシテ</sup>悔<sup>ル</sup>無<sup>レ</sup>滄。

靜<sup>ニ</sup>看<sup>レ</sup>好<sup>ニ</sup>光景<sup>一</sup>。自由<sup>ニ</sup>晚<sup>ル</sup>過<sup>マテ</sup>皇<sup>一</sup>

煩惱の境を分離して / 吟笠 東方<sup>ひしがた</sup>に到る / 目を山雲の白きに遊ばしめて / 心を野水の蒼きに慰む /

鐘鳴<sup>いづくわ</sup>つて寺有<sup>なかくほ</sup>ることを知り / 地凹<sup>なかくほ</sup>にして滄無<sup>く</sup>きことを悔<sup>く</sup>る / 靜かに光景の好を看<sup>く</sup>て / 自由に晩<sup>く</sup>るま<sup>で</sup>過<sup>く</sup>皇<sup>で</sup>

○東方 地名。桑名城外桑名郡東方村。『久波宗名所図会』上巻所載の「桑名御領行程図」に拠れば、桑名城の西方十二丁のところ  
に位置した。春流が住居した油町からほんの近郊である。また、同「東方村」の項に、「今一色八丁繩手の西にあり。東瀉、東梟。(中  
略)村上氏云、古の地理を案に、東方は桑名郡益田莊の海浜なり。東瀉と書しならん(下略)」と記し、『桑名百詠』よりこの詩を引  
く。

○煩惱境 煩惱に満ちた俗世間。 ○吟笠 笠をかぶって吟行すること。 ○游目 思うがままに眺める。『楚辭』離騷に「忽  
ち反顧して以て目を遊ばしめ、將に往きて四海を觀んとす」と。

○野水 野原を流れる川。 ○鐘鳴云々 北宋・王安石の「鐘山  
に遊ぶ」詩に「午梵雲を隔てて寺有るを知る」、南宋・陸游の「舟中」詩三首其二に「忽ち疏鐘を聴きて寺の近きを知る」と。ちな  
みに、『桑名市史』(本編第十一章「二宗弘通と本地垂迹」、第二十章「江戸期の仏教と当期創建の寺院附民間信仰」)の記述に拠れば、春流

が桑名に止住した当時、東方村地内には大福田寺・照源寺・専明寺の三寺があったと考えられる。大福田寺は、平安時代に創建されたと伝えられる古刹で、寛文年間に東方村地内に移るまでは桑名郡安永・江場二村の地内にあり、往昔は塔頭二十七院、末寺四十余寺を有する大寺であつた。照源寺は、寛永二年（一六二五）に、前年逝去した桑名藩主松平隠岐守定勝の菩提所として創建され、もと東海山泥洹院と号したが、翌三年に照源寺と改称された。後には松平越中守の菩提所ともなった桑名における名刹である。専明寺は、慶長元年（一五九六）僧了雲によって創建された寺である。大福田寺と照源寺は、古刹・名刹として当時の人々によく知られていたであろうし、また『久波奈名所図会』上巻所載の「西山図」に拠れば、この二寺は東方村地内でも比較的桑名城下に近い所であり、専明寺は少し奥まった山間に位置している。従つて、鐘声によつてはじめてその存在に気づくような寺は、専明寺ではなかつたかと思われる。なお、『久波奈名所図会』上巻に「照源寺」の図および「大福田寺」の図が載せられており、古刹・名刹にふさわしい境内のたたずまいを窺い知ることができる。○滄 滄海。あおうなばら。○好光景 すばらしい風景。これを「光景の好きを」と訓ずるのはやや無理がある。○自由 他から拘束されず、勝手気ままに。○適皇 往来するさま。『文選』卷十五、張衡の「思玄の賦」に「二紀五緯の網繆適皇を察す」とあり、李善注に「往來の貌」という。

○五言律詩 韻字 方・蒼・滄・皇（下平七陽）

煩惱に満ちた俗境を離れて、笠をかぶり詩を吟じながら東方村にやつて来た。山にかかる雲の白さをゆつたりとながめ、野を流れる水の青さに心慰められる。鐘が鳴つて寺があるのを知つたのは意外だったが、小丘に囲まれた窪地になつていて見えるかも知れないと期待していた海が見えないのは残念だ。とはいえ、すばらしい風景を心静かに看望して、気ままに日暮れ時まで歩き回つた。

城西南 亦有二愛宕山一。游歩 吟節晩歸



幽堂翁慰<sup>トシテ</sup> 寂<sup>カガナリ</sup> 林間<sup>一</sup>。輸與<sup>ス</sup>洛陽<sup>一</sup>愛宕山。東北也<sup>タ</sup>無<sup>レ</sup>叡峰<sup>一</sup>翠<sup>一</sup>。南江<sup>一</sup>白浪作<sup>シテ</sup>湖<sup>ト</sup>看<sup>ン</sup>

城の西南にも亦た愛宕山有り。游歩して吟筇晩に帰る

幽堂翁慰として林間寂かなり / 輸与す洛陽の愛宕山 / 東北也<sup>タ</sup>た叡峰の翠無し / 南江の白浪 湖と作して看ん

○城 桑名城。 ○愛宕山 桑名城外西南に位置し、走井山に連なる小丘。東南に視界のひらけた景勝の地。『久波奈名所図会』中

巻所載の「三丁懸田植・愛宕山」の図には、広く城下を見下す小丘の上に愛宕社、中腹に養像院、貸座敷などがあって、散策する人々の姿が描かれている。城下の人々の遊樂の地であった。 ○吟筇 詩を吟じながら杖をついて歩くこと。例えば、蒙齋（蔡正孫）の

「魏梅墅に寄訊す」詩（『聯珠詩格』卷三）に「吟筇山齋に過<sup>ユ</sup>ぎることを肯ぜんや未だしや」と。 ○幽堂 『文選』卷三十五、

張協の「七命」に「幽堂は昼密<sup>ビシ</sup>しく、明室は夜朗らかなり」とあり、奥深いさしきをいう。ここでは、愛宕山中にあった愛宕山

養像院（愛宕権現）の本堂を指す。『久波奈名所図会』中巻「愛宕山養像院」の項に、『桑名百詠』よりこの詩を引いている。 ○翁

慰 草木の盛んに茂るさま。慰は、蔚と同じ。『文選』卷四、張衡の「南都の賦」に「曖曖翁蔚、芬を含み芳を吐く」と。 ○輸與

に負ける。劣る。例えば、蒙齋の「漁翁」（『聯珠詩格』卷八）に「身閑なるは老漁翁に輸与す」とあり、増注に「輸は、委輸なり。

俗に負を謂ひて輸と為す。与は、許なり」という。 ○洛陽愛宕山 洛陽は、京都の雅称。愛宕山は、京都上嵯峨の北部にある山。

○也 文語の亦にあたる俗語。 ○叡峰 比叡山。 ○南江 桑名愛宕山より東南の方角に見える揖斐川の下流を指す。 ○湖 琵琶湖。

琵琶湖。

○七言絶句 韻字 間・山・看（上平十五刪）

奥まった本堂のあたりは草木が鬱蒼<sup>ウツソウ</sup>とおい茂り、林の中はひっそりと静まりかえっている。京都の愛宕山には見劣りするし、東北の方角にも緑たわわな比叡の峰に比すべき山もない。されど、白浪をあげて流れる南の大江を琵琶湖に

見立てることはできよう。

吟二賞 城外風景一舒レ氣

風流緼藉無二詞客一。獨歩閑吟欲レ延齡。海上白雲如二練白一。岫邊青葉似二氈青一。近時背レ惠悲二名辱一。  
當時每レ生輪二德馨一。村遠路長日移レ午。歸歟吟蹟酒初醒。

城外の風景を吟賞して氣を舒ぶ

風流緼藉の詞客無し／獨歩閑吟 齡を延べんと欲す／海上の白雲 練の白きが如し／岫辺の青葉の青きに似たり／近時 惠に背きて名の辱めを悲しみ／当日 生を毎つて徳の馨しきに輸く／村

遠く路長くして日 午に移る／帰らぬや吟髻 酒初めて醒む

○吟賞 詩を吟じめる。○舒氣 のびのびと氣を晴らす。○風流緼藉 風流で雅趣に富むこと。緼は、蘊と同じ。○詞客 詩人。○閑吟 のんびりと詩句を吟詠する。白居易の「行簡を夢む」詩に「天氣妍和水色鮮かなり、閑吟獨歩小橋の辺」と。○延齡 壽命をのばす。○岫邊 山のあたり。○背惠 君恩に背く。『文選』卷十三、禰衡の「鸚鵡の賦」に「敢へて惠みに背いて初めを忘れんや」と。ここで具体的にどういうことを指すのか、不明。春流に仕官の口があったのを断つたのであろうか。○名辱『文選』卷十六、江淹の「恨みの賦」に「名辱められ身冤す」と。○當日 昔日 往昔。○每生 生を貪る。いたずらに生に執着する。每は、貪の意。『文選』卷十三、賈誼の「鵬鳥の賦」に「夸者は權に死し、品庶は生を每(む)る」と。○德馨 香り高い徳。『尚書』君陳に「明德惟馨(ほ)る」、『文選』卷三、張衡の「東京の賦」に「乃ち大漢の德馨、咸(な)此に在るを知る」と。○帰歟 歟は、感嘆の助字。『論語』公治長篇に「子陳に在りて曰く、帰らんか、帰らんか」云々とあり、陶淵明の「帰去來の辞」の序に「眷然として帰歟の情有り」と。

の辞」の序に「眷然として帰歟の情有り」と。

○七言律詞 韻字 齡・青・馨・醒 (下平九青)

風流で雅趣を解するような詩人は他におらず、わが身ひとりのどかに詩を吟じそぞろ歩いて、長生きをはかる。海上の白雲は練絹のように白く、山辺の青葉は毛氈のような深緑。ちかごろ君恩に背いてわが名の辱められたのを悲しんだが、その昔もいたずらに生に執着して、結局、高い徳を身につけることはかなわなかった。めざす村は遠く路のり遙か、いつしか日は天高く上つてもう午時。帰ろかなと吟ずるわが鬢のあたり、酒もようやく醒めてきた。

矢田河原 有<sup>ニ</sup>梵宇<sup>一</sup>。修<sup>シテ</sup>行<sup>ニ</sup>。萬<sup>ニ</sup>日念佛<sup>一</sup>。不<sup>テ</sup>敢<sup>セ</sup>怠<sup>ニ</sup>遑<sup>一</sup>。偶<sup>テ</sup>來<sup>ニ</sup>猝<sup>一</sup>題<sup>ス</sup>。

矢田河<sup>ノ</sup>上<sup>リ</sup>有<sup>ニ</sup>金地<sup>一</sup>。僧<sup>シテ</sup>念<sup>ニ</sup>西方<sup>一</sup>。已<sup>ニ</sup>息<sup>ム</sup>疑<sup>ヲ</sup>。世<sup>ニ</sup>事<sup>一</sup>千般終<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>管<sup>セ</sup>。考<sup>テ</sup>鐘<sup>ヲ</sup>只<sup>ヒ</sup>恁<sup>キ</sup>唱<sup>ラ</sup>阿彌<sup>ヲ</sup>。

矢田河原に梵宇有り。万日念仏を修行して、敢へて怠遑せず。偶たま来つて猝に題す

矢田河<sup>ノ</sup>上<sup>リ</sup>金地<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>。僧<sup>ノ</sup>西<sup>ニ</sup>方<sup>一</sup>を念<sup>ジ</sup>て已<sup>ニ</sup>に疑<sup>ヲ</sup>を息<sup>ム</sup>。世<sup>ニ</sup>事<sup>一</sup>千般 終<sup>ニ</sup>に管<sup>セ</sup>ず。鐘<sup>ヲ</sup>を考<sup>ヒ</sup>つて只<sup>ヒ</sup>恁<sup>キ</sup>を唱<sup>ス</sup>ふ

阿弥を唱ふ

○矢田河原 地名。桑名城下矢田河原。『久波奈名所図会』中巻「矢田河原」の項に、「かけひ（掛樋。桑名郡江場村地内の小名）の西にあり。東西通り六筋あり。御足輕居住の地なり」とある。往時矢田村の地内に家人屋敷を区画し、また、町屋川（現、員井川）が走井山の下より城下寺町方面へ流れていた当時、この地帯は川原であつたので、その名を存する。○梵宇 寺。例えば、初唐・宋之間の「総持寺の浮図に登る」詩（瀛奎律髓）巻四十七に「梵宇三天に出で、登臨して八川を望む」と。ここでは、白谷山西竜寺を指す。『久波奈名所図会』中巻「白谷山西竜寺」の項に、「八幡瀬古西側にあり。浄土宗鎮西流義照源寺末。（略）当山開基全譽啓運は信濃の国の郷土なり。漂泊して桑名に來り出家遁世し、道心堅固の念仏者なり。慶安洪水（慶安三年、一六五〇）の後、矢田川原に於て溺死追福の為に常念仏道場を草創せり。（略）六代目光管春察の代、当寺大に中興せり。始め貞享貳年丑（一六八五）

三月十五日三十六年目に一万日廻向あり。西竜寺北の畠にて執行大法会なり。三十六年の間当寺火災の難あり、又住持代替の事ありて、式年の間常念仏間斷す。其後今に至るまで不斷念仏勤行の靈場なり」と記し、『桑名百詠』よりこの詩を引く。なお、この寺は明治維新とともに廢寺となつた。○萬日念仏 万日供養ともいう。長期間にわたつて供養し、念仏を続けること。○不敢怠違

『詩經』商頌・殷武に見える言ひ方。怠違は、おこたる。○猝 突然。急に。○矢田河 桑名を流れる川は、往時より大川の揖

斐川のほか、北郊を流れる大山田川と南郊を流れる町屋川の二川であつて、矢田川という名の川はない。『久波奈名所図会』中巻に、

西竜寺のあつた八幡瀬古について、「矢田八幡の社通り筋なり。矢田町通り筋より門前まで南北式町式拾四間あり。南の方に町屋川

よりの水道の通り筋あり。其辺西側に小瀬古あり。水道といふ處の小名なり。少々人家あり。此辺は江場村（桑名郡うち）地内なり。

通り筋東側は矢田村（同上）地内なり。南北通り筋の中程に水車よりの落水あり。小き土橋を掛く」と記している。この町屋川水道

を矢田川と称していたのであろうか。○金地 仏寺のこと。須達長者（給孤長者ともいう）が黄金を布いて祇園（祇陀太子の園林）

を買つた故事による。『釈氏要覽』卷上に「金地、或いは金田と云ふ。即ち舍衛国の給孤長者、黄金を側布して、祇太子の園を買ひ、

精舎を建て、之に請ひて之に居らしむ」と。○西方 西方浄土。○千般 いろいろ、種々。○不管 顧みない。関知しない。

○考鐘 鐘をうつ。考は、考と同じ。『詩經』唐風・山有枢に「子に鐘鼓有り、鼓するに弗（あ）ず考するに弗ず」とあり、毛伝に「考

は、撃なり」と。ここでは、叩き鉦をうつことをいう。○只恁 「ひたすら」と訓じているが、これは誤まり。文語の「只如此」

に当る俗語。○阿弥 南無阿弥陀仏の名号の略。

○七言絶句 韻字 疑・彌（上平四支）。起句は踏み落とし。

矢田河原に寺があり、僧たちは西方浄土を念じてもはや疑心を絶っている。世上の種々の出来事とはついぞかわりなく、鉦を叩いてひたすら南無阿弥陀仏と唱えている。

樂

魚<sup>ハアツヒ</sup>盤<sup>ニ</sup>深水<sup>ハウツクマル</sup>鳥<sup>ニ</sup>盤<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>。人<sup>ハ</sup>任<sup>テ</sup>生涯<sup>ニ</sup>隱<sup>ル</sup>市中<sup>ニ</sup>。炊<sup>キ</sup>米<sup>ヲ</sup>煎<sup>テ</sup>茶<sup>ヲ</sup>眠<sup>ケ</sup>曲<sup>レ</sup>尺<sup>ヲ</sup>。鍊<sup>リ</sup>詩<sup>ヲ</sup>賞<sup>テ</sup>月<sup>ヲ</sup>詠<sup>シ</sup>鳩<sup>ツム</sup>工<sup>ヲ</sup>。閑<sup>ニ</sup>消<sup>シ</sup>白<sup>ヲ</sup>日<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>慰<sup>ミ</sup>幽<sup>ミ</sup>獨<sup>ヲ</sup>。豈<sup>シヤ</sup>意<sup>ニ</sup>赤<sup>ニ</sup>貧<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>困<sup>ニ</sup>窮<sup>ニ</sup>。以<sup>コノコロ</sup>近<sup>ニ</sup>興<sup>ナリ</sup>闌<sup>ナリ</sup>般<sup>ニ</sup>若<sup>ニ</sup>酒<sup>ヲ</sup>。除<sup>ク</sup>無<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>滓<sup>ヲ</sup>老<sup>ニ</sup>衰<sup>ニ</sup>翁<sup>ニ</sup>。

樂

魚<sup>ニ</sup>は深水<sup>ニ</sup>に盤<sup>ビ</sup>び鳥<sup>ハ</sup>は空<sup>ニ</sup>に盤<sup>マ</sup>まる人<sup>ハ</sup>は生涯<sup>ニ</sup>に任<sup>セ</sup>せて市中<sup>ニ</sup>に隱<sup>ル</sup>る米<sup>ヲ</sup>を炊<sup>キ</sup>き茶<sup>ヲ</sup>を煎<sup>テ</sup>て眠<sup>ツ</sup>つて尺<sup>ヲ</sup>を曲<sup>グ</sup>げ詩<sup>ヲ</sup>を鍊<sup>リ</sup>り月<sup>ヲ</sup>を賞<sup>メ</sup>でて詠<sup>ム</sup>じて工<sup>ヲ</sup>を鳩<sup>ム</sup>む閑<sup>ニ</sup>に白<sup>ヲ</sup>日を消<sup>ス</sup>して幽<sup>ニ</sup>獨<sup>ニ</sup>を慰<sup>ム</sup>み豈<sup>カ</sup>に意<sup>ハ</sup>はんや赤<sup>ニ</sup>貧<sup>ニ</sup>の困<sup>ニ</sup>窮<sup>ニ</sup>に處<sup>ス</sup>ることを以<sup>テ</sup>近<sup>ニ</sup>興<sup>ナ</sup>闌<sup>ナ</sup>なり般<sup>ニ</sup>若<sup>ニ</sup>の酒<sup>ヲ</sup>無<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>の滓<sup>ヲ</sup>を除<sup>ク</sup>く老<sup>ニ</sup>衰<sup>ニ</sup>翁<sup>ニ</sup>

○魚盤の句 魚や鳥は、隱棲する自由な樂しみを象徵する。なお、盤を「あそぶ」と訓ずるのは、『尚書』五子之歌「盤游度無し」の条の伝に「盤は、游なり」とあるのによる。また、盤空の語は、例えば北宋の韓琦の「孫植太傅の後園の宴射に答ふ」詩に「大鵬空に盤つて輕搏せず」とみえる。○任生涯 なりゆきにまかせて生涯をおくる。例えば、白居易の「食後」詩に「憂ひも無く樂しみも無き者は、長短生涯に任す」と。○隱市中 『文選』卷二十一、王康琚の「反招隱」詩に「小隱は陵數に隱れ、大隱は朝市に隱る」と。○眠曲尺 白居易の「雨夜元十八に贈る」詩に「酒を把つて循環して飲み、牀を移して曲尺して眠る」とあるのを踏まえる。なお、「曲尺」の語を『白氏文集』の古訓では「ビヂヲマゲテ」と訓ずるが、本来、曲尺はかね尺をいい、ベッドを曲尺のように直角に並べて眠ること。「ビヂヲマゲテ」という訓には、『論語』述而篇の「疏食を食ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とす」が恐らくは意識されている。○鍊詩 詩句をねる。○鳩工 詩ではあまり見ない言い方。鳩は、集の意。○幽獨 孤独のさびしさ。例えば、白居易の「春日閑居」詩三首其一に「屋中に琴書有り、聯か以て幽獨を慰む」と。○赤貧 ひどい貧乏。○以近 而近と同じ。○般若酒 般若湯、すなわち禪家という酒の異名。般若は、仏教語で智慧。○無明滓 無明は、仏教語で、悟りへの障礙、物事の判断を停止させる迷妄をいう。滓は、にがり、けがれ。

## ○七言律詩 韻字 空・中・工・窮・翁（上平一東）

魚は深淵に泳ぎ鳥は空を飛び回っているが、そのようにこの私も生涯を市中の隠者として自由気ままに暮している。米を炊き茶を煎じて脰を曲げて眠り、詩句を鍊り月を愛でて少しでもうまく詩を作ろうと苦心している。かくのどやかに日を送り、孤独の寂しさを紛らわせて、すってんてんの貧乏で困窮しはてていることなど全く意には介さない。近ごろは、智慧を増すとかいう般若湯にすっかり参つてしまい、このおいばれ爺は迷いなぞ吹つとんでいる。

儒釋老三教、旨趣致一ナリ。非レ有非レ無不レ中ナラ。言一自然一亦贅ナリ。

龜毛兔角是非有。水月鏡花又不無。借問神通玄妙處。三教學士口都盧。

儒釈老三教の旨趣致一なり。有に非ず無に非ず中ならず。自然と言ふも亦た贅なり

龜毛兎角 是れ有に非ず 〃 水月鏡花 又た無にあらす 〃 借問す 神通玄妙の処 〃 三教の学士も口都盧

○三教旨趣致一 春流は「三教合論並びに序」（『釣虎弄筆』所収）においても「従来灼<sup>あき</sup>」かに三教の一致を知りて、帰心すること亦た久し」と述べている。また、彼には『三教同旨』と題する著作があったという。○不中 仏教において中は真実をいい、不中

も真実をいう。しかし、この不中は真実・不真実を超越しているという意味。『三論玄義』に「中は実を以て義と為す」、「中は不中を以て義と為す」とあり、又、「諸法の実相は、中に非ず不中に非ず」とある。○贅 こぶ。余分なもの。○龜毛兕角 亀に

毛を生じ、兎に角を生ずる。ありえないものの喩。『涅槃經』迦葉品に「一切世間に四種の無有り。(中略)四には畢竟名無きもの毛を生じ、兎に角を生ずる。ありえないものの喩。『涅槃經』迦葉品に「一切世間に四種の無有り。(中略)四には畢竟名無きもの毛を生じ、兎に角を生ずる。ありえないものの喩。『涅槃經』迦葉品に「一切世間に四種の無有り。(中略)四には畢竟名無きもの

た月と鏡に映った花。見ることはできても、その実体をとらえることのできないもの。○借問 試みにたずねる。○神通 靈妙で不可思議。○玄妙 奥深く測り知れぬこと。妙は、妙と同じ。○都盧 唐代の俗語で、「すべて」の意を表わす副詞。ここでは、

同じという意味に用いている。

○七言絶句 韻字 無・盧（上平七虞）。起句は踏み落とし。

亀の毛や兎の角は、実在するものではないが、さりとて水に映る月や鏡の中の花が、全く存在しない無だというわけではない。さてそこで、玄妙不可思議な奥義を尋ねてみれば、儒釈道三教の学士も口をそろえて言うことは同じ。

### 江村 晩歸

繫<sup>テ</sup>一船<sup>ヲ</sup>岸脚<sup>ニ</sup>一脱<sup>ス</sup>蓑衣<sup>ヲ</sup>。日<sup>クレ</sup>盱<sup>チ</sup>漁人<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>促<sup>ス</sup>レ歸<sup>ヲ</sup>。江水<sup>ハ</sup>揚<sup>テ</sup>レ波<sup>ヲ</sup>山<sup>ハ</sup>偃蹇<sup>ニ</sup>。蘆花<sup>シテ</sup>飄<sup>ラ</sup>レ雪<sup>ヲ</sup>雨餘<sup>ニ</sup>肥<sup>リ</sup>

### 江村の晩歸

船を岸脚に繫いで蓑衣を脱す / 日盱れて漁人方に帰を促す / 江水は波を揚げて山は偃蹇 / 蘆花 雪を翻して雨余に肥へたり

○江村 川沿いの村。 ○岸脚 岸辺。 ○蓑衣 みの。 かや・すげ・わらなどで編んだ雨具。 ○日盱 盱は、盱の誤まり。盱は、

日が暮れる。盱は、あさの意。 ○偃蹇 高くそびえるさま。疊韻の語。『楚辭』離騷に「瑤台の偃蹇たるを望む」と。 ○蘆花

あしの花。秋の風物で、その白い花穂は、しばしば雪や霜に喩えられる。 ○雨餘 雨上り。

○七言絶句 韻字 衣・歸・肥（上平五微）

※この詩は、友野霞舟『熙朝詩薈』巻二十に採られている。

船を岸辺に繫いで蓑を脱ぎ、日暮れて漁師は帰りを急かす。川の水は波を揚げ山は高く聳え、さながら雪が舞うように蘆の花が揺れて、雨上りにぼうつとふくらんだように見える。

安<sup>ス</sup>分<sup>フ</sup>

諸子 青編勤<sup>ム</sup>實學<sup>ヲ</sup>。三間 白屋寄<sup>ス</sup>浮生<sup>ヲ</sup>。一眞法界空三昧。堪<sup>タリ</sup>吟<sup>ニ</sup>遑遑<sup>トシテ</sup>遊<sup>コトヲ</sup>錦城<sup>ニ</sup>。分を安んず

諸子の青編 実学を勤む / 三間の白屋 浮生を寄す / 一眞法界 空三昧 / 吟ふに堪へたり 遑遑とし  
て錦城に遊ぶことを

○安分 己れの分に安ずる。白居易の「拙を詠ず」詩に「此れを以て自ら分に安んじ、窮すと雖も毎に欣欣たり」と。○諸子 もろもろの学者 ○青編 青糸で編んだ書物。○實學 実践躬行の学問。理論よりも実際に役立つ学問。朱熹の『中庸章句』に「其

の書は始めに一理を言ひ、中ごろ散じて万事と為り、末に復た合して一理と為る。(中略) 其の味窮まり無し。皆実学なり」と。

○三間 間口三間。狭い室をいう。白居易の「草堂に別る三絶句」其三に「三間の茅舎山に向つて開く」と。○白屋 白茅(やが)

葺きの粗末な家。『漢書』王莽伝の顔師古注に「白屋は、庶人の白茅を以て屋を覆ふ者を謂ふ」と。白居易の「自ら詠ず」詩に「只

だ合に一生白屋に眠るべし、何に因つてか三度朱輪を擁せしや」と。○浮生 はかなき人生。李白の「春夜桃李の園に宴するの序」

「『古文真宝』後集卷三」に「浮生は夢の若し」と。○一眞法界 仏教語で、生滅変遷の姿を絶した真理の世界をいう。○空三

昧 仏教語で、我と我が所を空であると観ずるための修業をいう。○吟 笑と同じ。あざけりわらう。○遑遑 あわただしいさ

ま。陶淵明の「帰去来の辞」(『古文真宝』後集卷二)に「胡為れぞや遑遑として何くにか之(之)かんと欲する」と。○錦城 本来は、

蜀の成都の異称、錦官城のこと。例えば、李白の「蜀道難」に「錦城は楽しと云ふと雖も、早く家に還るに如かず」とある。転じて、

美しい街、繁華な市中をいう。

○七言絶句 韻字 生・城(下平八庚)。起句は踏み落とす

学者たちの書物を読んで実践躬行の学につとめ、間口三間の陋屋にかりそめの身を寄せている。真理の世界に参ずべ



くすべては空であると観じているから、あたふたと繁華な市中に遊びに行くのは全く笑止千万。

久波奈 <sup>ヨリルマテアツクニ</sup> 至<sup>ニ</sup>厚田<sup>ニ</sup>。海路七里程。旅人乗<sup>テ</sup>船<sup>ニ</sup>忘<sup>レ</sup>疲<sup>レ</sup>。揣<sup>リ</sup>知<sup>ル</sup>夢魂<sup>ニ</sup>宜<sup>ク</sup>還<sup>ル</sup>二家郷<sup>一</sup>。  
西<sup>ヨリ</sup>來<sup>テ</sup>曼<sup>ナカフスレハ</sup>。目<sup>ヲ</sup>海平漫。行客共<sup>ニス</sup>船<sup>ヲ</sup>七里灘。迢遞<sup>タル</sup>路程一場夢。無<sup>ク</sup>端輕笑<sup>ニ</sup>。故郷<sup>ニ</sup>還<sup>ル</sup>。

久波奈より厚田<sup>あつた</sup>に至るまで、海路七里程。旅人船に乗って疲れを忘れ、揣り知る夢魂宜しく家郷に還るべし。  
西より来って目を曼<sup>なが</sup>うすれば 海 平漫 / 行客 船を共にす 七里灘 / 迢遞<sup>てうてい</sup>たる路程 一場の夢 / 端無く輕笑して故郷に還るらん

○久波奈 桑名。○厚田 熱田（現、名古屋市熱田区）。尾張國愛知郡のうち。東海道宮宿があり、鳴海から受け、桑名へ海上七里で繼ぐ渡場であつた。○揣知 推測する。想像する。○夢魂 古代中国においては、夢を見るのは魂が体から遊離するためだと考えられていた。○曼目 遠くを見わたすこと。『楚辭』九章・哀郢に「余が目を曼<sup>な</sup>くして以て流觀す」と。○平漫 ひろびろと広がっていること。○七里灘 七里の渡しを中国風にいふ。本来は、浙江省桐廬縣嚴陵山の西にある地名。後漢の嚴光（子陵）が隱棲したところ。晩唐の許渾に「七里灘」詩（『三体詩』卷三）がある。このことに關して、津阪孝綽（一七五七—一八二五）の『夜航詩話』卷四に「桑海<sup>なほ</sup>七里津、古へ間遠渡<sup>まのたりの</sup>（わたりの）」と稱す、日本紀に見ゆ。人率<sup>おほ</sup>（むね）ね知らざるなり。詩家或いは灘を以て稱し、嚴光の事を附会して以て作料と爲す、妄なり。灘は峽流險難の処、豈に渡津を稱す可けんや」といふ。『久波奈名所図会』では、上卷「間遠渡」の項に「七里渡、七里灘。尾州熱田へ七里、よって七里渡といふ」と記し、林羅山（一五八三—一六五七）の「桑名舟中」詩や林春斎（鷲峰 一六一八—一六八〇）の「桑名舟中作」詩と並べて、『桑名百詠』よりこの詩を引く。○迢遞 はるか

なさま。双声の語。○無端 意外にも。六朝以来の俗語。○輕笑 いささか笑う。微笑。

○七言絶句 韻字 漫・灘（上平十四寒）・還（上平十五刪）。

西の方からやって来て見渡せば、海は果てしく広がっている。見知らぬ旅人同士が同じ船に乗り合わず、この七里の渡し。はるばる辿る旅路の一場の夢。あれあれいつのまにか寝顔が微笑んでいる、故郷に帰った夢でもみているのだろう。

無家

人生盈<sup>レ</sup>數<sup>ニ</sup> 百年所。六十 老涯如<sup>シ</sup> 水雲<sup>一</sup>。逸士<sup>ハ</sup> 眼高<sup>シ</sup> 家<sup>トス</sup> 宇宙<sup>ヲ</sup>。早知<sup>ク</sup> 白髮<sup>ル</sup> 不<sup>レ</sup> 饒<sup>ル</sup> 君<sup>ヲ</sup>。

家無し

人生 數に盈<sup>み</sup>つれば百年所<sup>ばかり</sup> / 六十の老涯 水雲の如し / 逸士は眼高くして宇宙を家とす / 早く知る白髮の君を饒<sup>ゆる</sup>ざること

○盈數 『文選』卷二十八、陸機の「長歌行」に「遠期克く及ぶこと鮮<sup>な</sup>し、盈數固<sup>と</sup>に全きこと希<sup>まれ</sup>なり」とあり、李善注に「盈數は、百年を謂ふなり」、五臣注に「遠期は、上寿百二十歳を謂ふ。此の期に及ぶ者は少なし。能く之有つて此の數に満盈する者は固に全きこと希なり」と注する。 ○百年所 所は、ほど、ばかりの意。普通の人はせいぜい長生きをして人生百年というのが、中国古来の見方。 ○六十老涯 六十の老人になるまでの生涯。 ○水雲 雲水と同じ。行雲流水。流浪の人生を象徴する。

○逸士 世を通れた士。『文選』卷十、潘岳の「西征の賦」に「山潜の逸士の卓として長く往きて反らざるを悟る」と。 ○眼高

眼識がすぐれていること。 ○家宇宙 竹林の七賢の一人、晋の阮籍の「大人先生伝」には「天地を家と爲し」たとあり、劉伶の「酒

德頌」には「居るに室廬無く、天を幕とし地を席とし」たとある。これらを踏まえた表現であろう。 ○白髮不饒君 晩唐の許渾の

「隱者を送る」詩（「三體詩」卷一）に「世間に公道たるは惟れ白髮のみ、貴人の頭上にも曾<sup>つ</sup>て饒<sup>ゆる</sup>さず」とあるのによる。なお、この詩は杜牧の作とする説もある。

○七言絶句 韻字 雲・君（上平十二文）。起句は踏み落とし。

人生はせいぜい百年がばかりのこと。六十年の生涯はなべて行雲流水のごとくあてどないものであった。隠逸の士は眼識すぐれ、この宇宙をわが家と見做すものだが、さてもはなからわかつていたよ、白髪はそんなおまえさんでも遠慮容赦のないことを。

當日絶世超倫詩人。丈山元政。薄拙定志修習。欲比二肩於二子。終不成。咨已矣乎。

五十年來心染學。扶桑國裡以詩鳴。唐宋舊事真如夢。惟有蘇黃李杜名。

當日絶世超倫の詩人は、丈山元政なり。薄拙志を定めて修習して、肩を二子に比べんと欲す。終に成らず。咨、已んぬるかな。

五十年來 心 学に染まる / 扶桑國裏 詩を以て鳴らんとす / 唐宋の旧事 真に夢の如し / 惟だ蘇黃李杜の名のみ有り

○當日 昔日、往昔。 ○絶世超倫 ずばぬけて優れ世に並ぶものがない。天下無双。『文選』卷五十八、蔡邕の「陳太丘の碑文」に見える語。 ○丈山元政 石川丈山（一五八三―一六七二）と僧元政（一六二三―一六六八）のこと。丈山には詩文集として『覆

醬集』『新編覆醬集』があり、元政には『艸山集』『元唱和集』がある。現在、いずれも汲古書院刊『詩集日本漢詩』に収められている。また、詩の選訳注に上野洋三氏による『石川丈山 元政』（江戸漢詩人選集第一巻 岩波書店）がある。春流は、この二人に深く傾倒しており、「難波百絶序」においても「素心」に四明の隠士石子が鍊磨の俗耳を醒ますを觀ては、杜子美が言律を羨ひ、深草の教僧妙子が易直の塵襟を潔するを憶ふては、白樂天が句法を觀ふ」と述べている。「四明隠士石子」は丈山、「深草教僧妙子」は元政のこと。なお、丈山・元政が江戸初期を代表する漢詩人であるという見方は、他に例えば、江村北海（一七一三―一七八八）

の『日本詩史』卷三に「寛文（二六一―一六七三）中、詩豪と称する者、石川丈山・僧元政に過ぐるは無し」と示されている。

○咨 嘆く声。 ○已矣乎 どうしようもない。 もうおしまいだ。 悲観や絶望を表わす。 陶淵明の「帰去来の辞」（『古文真宝』後集

卷二）に「已んぬるかな、形を宇内に寓すること復た幾時ぞ」と。 ○染學 學問に親しむ。『文選』卷六、左思の「魏都の賦」に「言

を非<sup>（つ）</sup>く行ひを厚くし、化を陶し學に染む」と。 ○扶桑 日本のこと。もと、伝説上の神木の名で、中国東方の日出るあたりに

あったという。転じて、わが国のことをいう。 ○以詩鳴 韓愈の「孟東野を送るの序」（『古文真宝』後集卷三）に「孟郊東野、始

めて詩を以て鳴る」とあるのによる。もとは、すぐれた詩の創出によって自己を表現し、現実への意志表示を行うという意味だが、

ここでは、詩人としての名声を高く鳴りひびかせること。 ○蘇黃 北宋の蘇軾（一〇三六―一一〇一）と黃庭堅（一一〇四―一一

〇五）。 ○李杜 盛唐の李白（七〇一―七六二）と杜甫（七一二―七七〇）。

○七言絶句、韻字 鳴・名（下平八庚）。起句は踏み落とし。

この五十年というものの心底學問に親しみ、日の本でひとかどの詩人としてその名を鳴りひびかせたいと思っていた。さて華やかなりし唐宋のふるき世のことは全く夢のようで、ただ蘇軾・黃庭堅や李白・杜甫の名が今に伝わっているだけだ。

隱士

永退<sup>クハ</sup>林中<sup>ニ</sup>一心自閑<sup>ナリ</sup>。鳥飛<sup>テ</sup>樹底<sup>ニ</sup>白雲還<sup>ル</sup>。一生不<sup>レ</sup>管<sup>セ</sup>人間<sup>ノ</sup>事。吟<sup>ニ</sup>賞<sup>シテ</sup>煙霞<sup>ヲ</sup>一屐<sup>シタ</sup>響<sup>ク</sup>レ山<sup>ニ</sup>。

隱士

永く林中に退けば、心自ら閑なり。鳥は樹底に飛びて 白雲還る。一生管せず 人間の事。煙霞を吟賞して 屐 山に響く。

○心自閑 李白の「山中、俗人に答ふ」詩（『古文真玉』前集卷中）に「余に問ふ何事ぞ碧山に栖むと、笑って答へず心自閑なり」と。  
○樹底 木立ちの辺り。 ○白雲還 山から立ちのぼった白い雲が、再び山に帰ってくる。 なお、白雲郷と言えば、仙人や隠

者の住む世界を指す。 ○不管 関知しない。 ○人間事 世間の俗事。 ○煙霞 もやかすみ。 山水の景色。

○七言絶句 韻字 閑・還・山（上平十五刪）

※この詩は、友野霞舟『熙朝詩薈』巻二十に採られている。

ながら林中にひきこもっていると、心はおのずとゆったりしてくる。鳥は木立ちのあたりを低く飛びかい、白い雲は再び山に帰ってくる。一生、世間の俗事とは関わらずに過して来た。山水の美しい景色を愛で、詩を吟じながら歩く足駄の音が、山に響きわたる。

冬日懸<sup>ハルカニ</sup> 見<sup>ミ</sup>江山<sup>ニ</sup>有感<sup>チ</sup>

薄言<sup>ハラク</sup>逃<sup>レハ</sup>俗網<sup>ニ</sup>。景物麗<sup>シ</sup>晴空<sup>ニ</sup>。江北雪山白。嶺南霜葉紅。掃<sup>チ</sup>二千愁萬念<sup>ニ</sup>。思<sup>フ</sup>一世群雄<sup>ニ</sup>。雖<sup>モ</sup>三德流<sup>ルト</sup>天下<sup>ニ</sup>。老

來不<sup>レ</sup>勸<sup>レ</sup>功<sup>ヲ</sup>

冬日懸<sup>ハルカニ</sup>に江山を見て感有り

薄言<sup>はやく</sup>く俗網を逃るれば / 景物 晴空に麗し / 江北 雪山白し / 嶺南 霜葉紅なり / 千愁万念を

掃<sup>はら</sup>つて / 一世の群雄を思ふ / 徳 天下に流ると雖も / 老來 功を勸めず

○薄言 いささかここに。発語の助字。『詩経』に見える言い方。例えば、召南・采芣苢に「采采芣苢、薄言采之」とあり、中村楊斎（一六二九—一七〇二）の『詩経示蒙句解』では、この二字を「シバラク」と訓じている。 ○俗網 俗世のあみ。俗世間の煩らい。

○景物 風景。ながめ。 ○江北 ここでは、揖斐川の北方をいう。 ○雪山 ここでは、すっぽりと雪に覆われた伊吹山をいうの

であろう。冬期、桑名の地より揖斐川の流れをこえて北方遙か遠くに望むことができる。○嶺南　ここでは、伊勢国の北端から揖

斐川に沿って美濃国の西端に連なる養老山系の南面をいうのであろう。○霜葉　霜後の紅葉。杜牧の「山行」詩（「三体詩」卷一）

に「霜葉は二月の花よりも紅なり」と。○千愁萬念　くさぐさの愁いやおもい。○一世群雄　その時代にあつて傑出した英雄た

ち。蘇軾の「赤壁の賦」（「古文真宝」後集卷一）に、魏の曹操について「固（こ）に一世の雄なり、而して今安（あ）くに在りや」と。

ここでは、具体的に誰を指すのか不明だが、徳川家康を含む戦国の世の群雄をいうのであろうか。○徳流天下　『文選』卷四十五、

東方朔の「客の難ずるに答ふ」に「聖帝徳流れ、天下は震懼し、諸侯は賓服し」云々とある。○勸功　功業を立てるよう努める。

『礼記』王制篇に「民咸（みな）其の居に安じ、事を樂しみ功に勸（すす）め」云々と。

○五言律詩　韻字　空・紅・雄・功（上平一東）

しばし俗世間の煩わしさから逃れてやって来ると、晴れわたった空の下、眺めはすばらしい。揖斐川の北方には雪を冠った伊吹山が白く輝き、養老の嶺の南側には木々が紅く色づいて見える。くさぐさの愁いや雑念をすっかり払って、一世の英雄たちのことをつらつら思うに、その徳はあまねく天下に流れているが、年老いてからは残念ながら身を入れて治政に励まなかったといえる。

## 田家樂

一生樂<sup>テ</sup>業<sup>ヲ</sup>腰<sup>ニスル</sup>鎌<sup>ヲ</sup>叟<sup>ヲ</sup>。往歲山村又有<sup>レ</sup>秋。南畝東臯歸飯<sup>テ</sup>稻<sup>ヲ</sup>。蝸廬伸<sup>テ</sup>脚<sup>ヲ</sup>更何<sup>ニ</sup>求<sup>フ</sup>

## 田家の樂しみ

一生　業を樂しみて　鎌を腰にする叟　／　往歲　山村　又た秋<sup>みのり</sup>有り　／　南畝東臯　歸つて稻を飯<sup>めし</sup>にす　／　蝸廬　脚を伸べて　更に何をか求めん

○田家 農家。 ○樂業 なりわいを楽しむ。 ○腰鎌叟 宋末元初の釈英実存の「永康の道中」詩（『白雲集』巻上）に「白髮鎌

を腰にする叟、緇衣笠を頂く僧」と。 ○往歳 先年。過ぐる年。 ○秋 みのり。收穫。『尚書』盤庚に「農の田に服し穡に力め、

乃ち亦秋有るが若し」、白居易の「東遊を想ふ」詩に「海内時に事無く、江南歳に秋有り。生民皆業を楽しみ、地主尽く賢侯」と。

○南畝 南向きの日当りのよい田畝。『詩経』に見える語。例えば、小雅・甫田に「今、南畝に適（ゆ）き、或いは耕し或いは耔す」と。 ○東臯 東の岡の田。『文選』卷四十、阮籍の「奏記して蔣公に詣る」に「東臯の陽に耕し、黍稷の税を輸（こ）し」云々とあり、

陶淵明の「帰去來の辞」に「東臯に登って舒（おほ）ろに嘯（ささ）く」と。 ○蝸廬 かたつむりの殻のような小さな家。蝸牛廬。三国魏

の隱者、焦光が円形の小さな家を作って蝸牛廬と称したという（『三国志』卷十一、胡昭伝の裴松之注に引く『魏略』に見える）。

○伸脚 足をのばす。のびのびとくつろぐこと。 ○更何求 杜甫の「江村」詩に「微軀此の外更に何をか求めん」と。

○七言絶句 韻字 叟・秋・求（下平十一尤）

一生涯そのなりわいを楽しむ鎌を腰にしたじいさん。その昔は山村にも豊かな收穫があった。南の田、東の岡を耕して家に帰れば米の飯。蝸牛みたいな狭い家でものびのびと足を伸ばしてごくらく気分。